

剣士の帰還

1

「よし、今日はカッシュマーの街で泊まりだ。少しばかり骨休みができるぞ！だが、気を抜くなよ！奴らはいつ襲ってくるかわからんのだからな！」

隊長の声が土埃にまみれた隊列に響いた。名前はケルクスラドリアドボルジェクターゼンという。この奇妙な隊商の警護の長ではあったが、隊長というわけではない。だが、皆彼のことを隊長と呼んでいたし、私も彼の長い名前を間違えずに呼ぶ苦労をする気もなかった。

隊商はサンジェリイへと南に白銀街道を下っていた。何事もなければ後二日の行程だろう。街道は交易に熱心なエイマン王の肝煎りできれいに整えられていたが、王とは言え岩と砂の荒れ地を沃野に変えることは出来なかった。

砂まじりの乾いた風が吹き抜ける奇妙な形の岩山の間を、縫うように隊商は進んでいた。至って小規模な隊列だ。大事な品物を運ぶための幌付き荷馬車が二台、大事な人間を運ぶための大振りのお頭立てが一台、それほど大事でない人間を運ぶためにもう一台、これを守るために四十騎ほどが前衛、後衛についている。ケルクスラドリアドボルジェクターゼンが率いる傭兵（白狼隊）だ。

いったい、どんな大事な品物を運んでいるのか、どんな大事な人間が馬車に乗っているのか、一切は明かされなかった。街道沿いに山賊盗賊の類が出没するのは、エイマン王の威光と警邏隊の取り締まりを持ってしても、根絶することはできなかったが、それにしても大袈裟な警護のように私には思われた。

「スナブ・ランケン、金砂亭のスペルコ料理はうまいぞ！メクスー

ラもな！おまえの世界放浪の話も聞かせてくれ！」

隊長が銀色に輝く兜の虹色の羽飾りを揺らして怒鳴った。日に焼けた精悍な顔の中で、ぴんと張って先端が渦を巻いた口髭だけが笑っているようだった。

「虫が入っているやつは、勘弁してくれ。ちょっと、嫌な思い出があるんだ」

「その思い出とやらも聞きたいもんだ！楽しみにしているぞ！」

隊長はさらなる下知のため、隊列の後方へ去った。計算高いが仕事はきつちりとこなす、傭兵隊長としては信頼できる男だった。

私はすぐ前に行く四頭立ての馬車を見やった。砂埃にまみれて薄黄色の面紗を被ったように見えるが、艶のある黒塗りに金銀で飾り模様が描かれ、螺鈿細工も施された特別仕立ての馬車だ。窓には緋色の窓掛が下ろされ、中を伺うことは出来ない。

ホライウォードの遺跡―巨大な、しかし奇妙に安普請にも見える、神殿ともただの蔵とも思える石造りのがらんどろ―からサンジェリイへ、大切な品物を運ぶ護衛という仕事を引き受けたのは、十日程前のことだった。

私の聞かされた話はこうだ。サンジェリイのある宝石商が、ホライウォードの遺跡から発見された宝物をエイマン王へ献上したいと考えている。しかし、道中は近頃盗賊が出没し、しかもこの盗賊団には奇怪な妖術使いや魔剣の使い手までいる。そこで、怪異な事件を幾度も解決しているというスナブ・ランケン殿の御力を是が非でも拝借したい。地味だが仕立ての良い焦げ茶色の服を着た男がやってきて、馬鹿丁寧な口調でそう言ったのだ。

私はこういった依頼があつた時のためのお決まりの台詞で答えた。確かに奇怪な事件には幾度も遭遇しているが、必ずしも解決しているわけではない。むしろ、不可解なまま終わることの方が多いくらいだ。過剰な期待を持たれても困る。

焦げ茶色の服の男は、それでも是が非でもお願いしたいと言い、用意しているという報酬について述べた。一日四十ダズン、それと

必要な掛かりを頂くとというのが、私の決まりの額だが、彼の示した報酬はそれよりも一桁多い額だった。

クーリカフ街の私の住処兼仕事場は、あちらこちらにがたがた来ていて、大工を入れる必要があった。金のためなら何でも引き受けるわけではないし、こうした話には当然裏があることもわかっていたが、借金はしないというのも、私の決まり事の一つだった。

私は焦茶色の服の男―アブリュード宝石商会から来た―にこの仕事を引き受けることを伝えた。

「必ずや引き受けてくださると信じておりました。〈勝者の門〉に足の速い馬を用意してございます」

男は非の打ち所のない笑顔を浮かべ、手付金を懐から取り出した。その金で旅支度を整え、今日にも出立してほしいということだった。私はその通りにして、四日後にはホライウオードの遺跡に到着し、一行と合流した。

大事な荷物を積んでいるらしい幌馬車は主に隊長率いる傭兵隊が護り、私はこの隊の主人が乗っているらしい黒塗りの馬車に付くように言われた。

ケルクスラドジアドボルジェクーゼンは遺跡を出立前の夜、奇妙に大規模な護衛隊に向かつて端的に仕事についての話をした。

「よく聞け！我々の仕事はこの遺跡から掘り出された宝物を無事サンジェリイまで届けることにある。宝物は緑玉の彫像だ。アブリュード宝石商会ではこの宝物をエイマン王への捧げものとするつもりで、既に王宮には類い稀なる献上品が向かっているという知らせが届いている。エイマン王の古物に対する愛着の深さは巷間知れ渡るところだ。無事送り届けることが出来れば、雇い主より特別の報償が約束されている。王の御機嫌が麗しければ、さらなる手当がないとも限らん！」

「よく聞け！これは〈良い仕事〉だ。だが、大輪の花を得るためには、その前に茨の叢を通り抜けなければならない。白銀街道沿いに出没する野盗どもについては、おまえたちも知っているだろうが、

〈紫電の犬〉が我らの宝物を狙っているという知らせがあった。奴らは犬などと名乗っているが、そこいらの痩せ犬のような盗賊どもとは違う。東部から来た魔道士に、奇怪な魔剣の使い手までいるという。

「だが、恐るるには足らん！我らは百戦錬磨の強か者だ。おまけに今回は大都サンジェリイで有名な魔道探偵スナブ・ランケンが仲間に加わっている！我らの前には成功と悦楽が横たわっている！五日後には大都の酒場には我らの笑い声が轟き、娼館には女の呻き声が渦巻いているはずだ！」

傭兵たちはお定まりの雄々しい叫びと豪快な笑い声をあげた。

サンジェリイへの道は何事もなく始まり、何事もなく数日が過ぎた。街道を歩き交う人々の間には盗賊出没の噂もなく、隊商は平穩に目的地へと向かっていた。隊長は用心深く、本道へ戻り宿場町に泊まることもあれば、間道からも外れ、荒れ地の中で一泊することもあった。

黒塗りの馬車の中の人物は決して姿を現さなかった。宿場に泊まる時には、宿屋の前に馬車を寄せ、荒れ地に泊まる時には馬車のすぐ前に大きな天幕が張られた。

だが、噂というものは髪の毛一筋の隙間からも流れ出してくる。私が聞いた最初の噂は、この隊商の主人は女だというものだった。曰く、馬車の紗幕の中から聞こえてきた下知の声はうら若い女のものだった、黒い服に身を包んだ美しい女の姿を見た、ホライウオードの遺跡発掘の指揮もその女が執っていた等々。

次に聞いた噂は、その女主人が誰なのかというものだった。曰く、アイトーネ街で一番の大富豪の娘である、エイマン王が新しく迎える異国の寵姫である、いや実は恐ろしい女魔道士である等々。

噂は馬車の中の人物に関してだけではなかった。〈紫電の犬〉の魔道士は雷を自在に操る妖術の使い手である、東部から来た剣士の振るう剣は殺した相手の血を吸う生きた魔剣である、また、ホライウオードの遺跡から出たという宝物も実は某かの魔力を持つ品物

で、〈紫電の犬〉はその怪しの力を手に入れるために、宝物を狙うという話もあった。

魔剣なら私も持つていた。三千年前に海中に没したという西海の果ての国フアバーンの文字が刻まれた魔剣だ。歳月がほとんどの魔力を奪い去っていたが、異界の力が働く場所では、奇妙なしびれにも似た感覚を伝えることもある。だが、今回の旅の途上では未だそうしたこととは起こっていなかった。

敵の姿は見えず、噂が噂ではないことを示すような事も起こらなかった。私は二日目の夜、黒塗りの馬車から大天幕に主人が移る時に、甘い香水の匂いを嗅いだような気がしていた。だが、香水をつけるのは女とは限らない。金と権力を持った手合いは、その腐った臭いを隠すために男女を問わず、香水をつけたがる。

隊商は何事もなくカッシュマの街に入った。荒野の岩山の彼方に沈む夕日が、恐ろしいほど美しく、朱の色に馬も人も馬車も染め上げていた。街の門を潜り金砂亭なる宿で宿泊の準備をしている内に、金色の光は去り、空は深い青紫色へと変じていった。夕星が西の空で鋭い光を放っていた。

2

カッシュマはサンジェリイへの北の玄関口として、それなりに隆盛を誇っている街だった。大都の中ではやり難い諸々の取引の場として栄えているという話もある。

金砂亭は街内でも、最も格式の高い宿らしかった。街の中ならまず安全だろうということで、籤に外れた運の悪い連中を残して、他の傭兵たちには一夜の宴が用意された。

私は隊長と他の数名とともに、別室での夕食に呼ばれた。

あまり趣味が良いとは思えない朱塗りの廊下を歩きながら、ケルクスラドジアドボルジエクーゼンが言った。

「スナブ・ランケン、我らの雇い主はおまえの事が大分気に入っているらしい。滅多な事では、直接お目通りはかなわぬ相手だぞ。おまえもここで覚えよろしきことになれば、探偵稼業にも弾みがつくというものだ。驚かぬように言っておこう。我らの雇い主は〈ヴァアラナの花〉と言われている御仁だ」

〈ヴァアラナの花〉という名には聞き覚えがあった。近頃サンジェリイの社交界では、よく囁かれる名前らしい。ヴァアラナというのは、数年前にできた城のような威容を誇る社交場だ。もちろん私のような者は、一月の稼ぎを全部つぎ込んで一夜を過ごすことにはできない。たとえダズン金貨を革袋にいっぱいにしていても、入れてはもらえない。そこでは家柄とか格式とかいうものが、金貨と同じくらいに重要なのだ。

ヴァアラナというのはインダ・ヤースラカバラカッシュあたり言葉で、棘のある大輪の花のことだった。異国趣味で付けられた名なのだろう。そのヴァアラナという花の中の花と言われる女。有り余る富、溢れる商才と教養、類い稀なる美貌、そして無限の欲望を併せ持つ女。だが、私は腐敗臭のする貴族や大商人どもの噂話などに興味はなかった。だから、その女の本当の名前など、知らなかった。

金の引手のついた扉を赤紫のお仕着せを来た女中が開いた。金銀と朱で彩られた華やかな部屋の奥には、黒い服を来た色白の美しい女が座っていた。

「久しぶりね、ランケン」

ウエゲナー・ダイン、かつての私の恋人がそこにいた。

「やあ……そうだね、ウエグ」

私は干涸びた声を喉から絞り出した。

年月は彼女から何も奪うことはできず、ただ美貌だけを与えていた。長身に艶やかな栗色の髪を高く結い上げているので、並の男よりも大柄に見える。髪飾りは金と銀と黒漆、黒い絹の衣裳は胸元が大きく開き、無数の金剛石を埋め込んだ首飾りが雪白の肌と輝きを競っている。ほんの少し肉がついたようにも見えたが、それがか

えつて成熟した女の魅力を高めていた。熟れきった桃のような唇、柔らかな曲線を描いた薔薇色の頬、青い宝石のような瞳を埋め込んだ切れ長の目。面長の美しい顔はあまりに整いすぎて白磁の人形のようにも見えた。

「知り合いなのか、〈ヴァアラナの花〉と……」

隊長が驚きと幾分か嫉妬の混じった面持ちで、囁いた。

「ああ、かろうじて……大昔の話さ」

私とウエグはシュヌベル大学のサンジェリイ市史の講座で知り合った。彼女の父親は大都サンジェリイの一等書記官で、母親は大きな交易商を切り盛りしていた。聡明で美しく素晴らしい恋人だったが、彼女は自分の持つ富と権力に何の疑いも持つてはいなかった。私は彼女の夫に収まる道よりも、一人未知の世界を彷徨う旅に出ることを選んだ。

彼女はある魔道士の力を借りて、私を引き止めようとした。それは不幸な結果を招き、私は彼女に別れを告げることもなく、世界放浪の旅に出た。

あれからどれほどの歳月が過ぎたのだろうか。長い彷徨の旅からサンジェリイに帰り、探偵稼業を始めてからも何年もの月日がたつていた。こんな形で彼女に再会することがあるうとは、まったく考え及ばないことだった。

ウエグの青い瞳が私を見ていた。口元にかすかな笑み、青い瞳には灯りのせいだろうか影が濃い。私はその視線にどう答えてよいかわからなかった。

幸いなことに、ウエグの隣に座っていた男が違う答えを出してくれた。隣の男一年若く優しく顔立ちの男前だが、不安と嫉妬の入りに交じった面持ちで、ウエグに早口で何事か囁いていた。

ウエグは酷薄とも見える薄笑いを浮かべながら、若い男の耳元で何事か囁いた。若い男は少しばかりほっとしたような顔になり、葡萄酒の注がれた酒杯を手を取った。彼女がそんな表情をするのを見ることがなかった。

宴はどうでもいいような挨拶やお決まりのお追従を交えながら進んだ。ウエグは最初の一言の後は私に声をかけなかった。彼女は見事にアブリュード宝石商会の女主人として（それは彼女が新しく興した商売らしかった）振る舞い、美貌と才気でその場にいる全ての人間を支配した。

「あれが〈ヴァアラナの花〉のお相手のマケナット、売り出し中の美人画描きだ。どうもああいう優男がお好ましい」

傭兵隊長がメクサーラで上気した赤ら顔に、苦々しい笑いを浮かべて言った。

「彼女は未婚なのか」

私の問いに、長い名前の男は嘲るように小さく笑った。

「いやいや、ご立派な旦那様がいらつしやるよ。父親の跡を継いで、いずれは一等書記官になるだろうと言われている。だが〈ヴァアラナの花〉はこの婿殿には満足しておられぬらしい。火遊びの噂は次から次へと絶えることがない。まあ、皆あつという間に捨てられるらしい、花火のようにな」

私はつまらない質問をしたことに遅ればせながら気付いた。宴はいつそう空疎なものとなり、十年ものという琥珀色のメクサーラも舌を刺す安酒のようだった。

幸いなことに、隊長は酔っても自分の仕事をすべて忘れることはなかった。座の面々の台詞がしどろもどろになり始める前に、席を辞する分別を持ち合わせていた。

「今宵は素晴らしい宴にお招きいただき有り難うございます。そろそろ荒野の彼方で、盗人どもが明日の仕事の手はずを整える時刻、我らも備えをしたいと存じます」

赤ら顔でも彼は適切な台詞をしつかり言うことができた。

「白銀街道にその名を馳せる〈白狼隊〉の隊長ケルクスラドジアドボルジェクエーゼンの武勇伝が聞けないのは至極残念ですが、ホライウオードの至宝を守るためとあつては致し方ありません。名に恥じぬよう務めを果たしてください」

ウエゲナー・ダインの膳には空になったメクサーラの杯が三つほど転がっていたが、薔薇色の頬がわずかに色を濃くした以外に、彼女には何の変化もなかった。

私は傭兵たちと一緒に宴席を離れた。朱塗りの廊下を歩み去ろうとすると、赤紫のお仕着せを来た女中が、静かに私の袖を引いた。

「ウエゲナー・ダイン様より言つてを預かつております」

女中は白く小さな手に隠した折り畳まれた紙片を、私の手のひらにそつと押し込んだ。開いてみると「翠帳の間にて、二刻の後に待つ」と流れるような筆致で書かれていた。

私には狭いながらも独り部屋があてがわれていた。妙に幅の狭い寝台に横たわり、その紙片を指先でひねくり回してみた。薄い桃色を帯びた漉きの荒い紙で、ごく小さな金箔が散りばめられている。かすかに甘い香が焚き込められているようだった。

細いがしつかりした力強い筆致だった。昔もらった恋文を思い出し、私は一人苦笑いを浮かべた。

どこか遠くで時を告げる鐘がなった。その紙を破り捨て、ただ仕事を遂行するのが正しい選択なのかもしれない。だが、私は違う選択をした。いつでも、大事な時に選択を誤るような気が、いつからかしていた。この時もそうだったのかもしれない。

私は重い気持ちで寝台から起き出し、ウエグの待つ部屋に向かった。

翠帳の間は宿の少し奥まったところにある小さな部屋だった。他の部屋からは少し離れていて宴の喧噪も聞こえない。淡い緑色の壁に墨一色で描かれた荒れ野の絵が下がっている。くすんだ金色の洋灯が、もう少し鮮やかな金色の光を放っていた。

部屋の中にはウエグともう一人の人間がいた。先刻、隊長が「ヴァアラナの花」のお相手だと言っていたマケナットという優男が彼女の隣に座っていた。

絵描きだという若い男は、細い筆を手にして肘掛けに腕を乗せて物憂げな姿をとった女を画帳に描きとめていた。

「来てくれたのね、ランケン」

彼女が姿勢を崩し笑いかけたので、画家の素描は中断の憂き目にあつた。若い男はいささか不機嫌な面持ちで私の顔を見た。

ウエグは男の様子には無頓着に私のことを紹介した。

「マケナット、さつきも話したスナブ・ランケンよ。シュヌベル大でサンジェリイの歴史や伝承を学んでいた時の友達なの。アイトーネ街風に言えば、御学友つてやつね。こう見えても剣術の腕も師範並なのよ。スレプクレージュの剣術道場では、あの偏屈道場主も一目置くくらいだったわ。マケナット、私もスレプクレージュ剣術道場に通つたことがあるのよ！」

酔うと早口で楽しげにまくしたてるのは、昔とちつとも変わっていないなかつた。最初の数杯は落ち着き払つて何事もないかのように飲むのだが、急に酔いが回つておしゃべりになるのが彼女の酔い方だった。

マケナットは不機嫌そうな顔で、墨の乾き具合を確かめてから画帳を畳み、筆を金剛石の光る矢立にしまい込んだ。

「ランケン、こちらはデイタモンナ・マケナット、今やサンジェリイきつての美人画描き、ドウネカーンの名前ではサンジェリイで一番儲けている春画描きね」

ウエグの紹介は絵描きをさらに不機嫌にさせたようで、マケナットは仏頂面でかすかに頷いただけだった。

絵描きは細面の男前だった。端が下がり気味の眉毛に眠たげな黒い瞳、薄笑いが張り付いたような薄い唇、鼻が少しばかり大きすぎるのが玉に傷だろうか。値の張りそうな黒い天鵝絨の服を着ている。飾り気のない服だが、銀に金剛石をちりばめた大きな胸飾りはまばゆく輝いていた。

「スナブ・ランケン、クーリカフ街で探偵局を開いています」

私の手短な自己紹介も、画家はお気に召さなかつたようだった。「探偵稼業か。醜聞を新聞屋に売りつけるのも仕事のうちかね」

刺のある声でマケナットは言った。

「顧客の私事を明かすことはしません。離婚問題も扱いません」

「それは、大いに結構なことだ」

マケナットは口をへの字に曲げたまま、小さな酒杯のメクサーラを飲み干した。ウエグは自嘲ともとれる小さな笑いを浮かべ、自分の杯を干した。

ウエグは新しい杯に淡い琥珀色の酒を注ぎ、私に手渡した。

「ククルボルのメクサーラよ。今でも〈山津波〉をあおつてるの？」

彼女は懐かしい安酒の名を覚えていた。透き通った酸っぱい火酒で二人で酔いつぶれたこともあったのだ。

「もつばらダイコンだね。〈古鴉〉が真の友さ」

私の雇い主はたいした興味も示さずうなずき、それから自分の杯と若い絵描きの杯にも酒を注いだ。

「さあ、ランケン、あなたのことを話して。どこに行つて、何をきてきたの？サンジェリイ随一の魔道探偵になるまでに、何があつたの？でも、まず乾杯よ！」

何に乾杯するのはわからなかったが、私達三人は小さな硝子の酒杯をかちんと音をたてて合わせた。

ぎごちない奇妙な宴が始まった。私は世界放浪の旅をかいつまんで話した。メルカー諸都市での冒険、アニヤチ帝国での逃走劇、イオロープで出会った様々な怪異、東の玉座を巡る不毛の闘い……。

ウエグは私の話に聞き入り、感嘆の声をあげ、時折適切な質問をした。酔つてはいても〈ヴァアラナの花〉らしき優美な社交術は忘れはしなかった。マケナットは終止仏頂面でメクサーラをあおつていた。

まったく奇妙な気分だった。彼女とここでこうしているというこ

とだけでも、十分不可思議だったが、隣には彼女の愛人までいる。ウエグは非の打ち所なく美しく、社交界の女王然としていたが、その表情も言葉もどこか芝居じみているように思えた。彼女は私からほんのわずかな距離、手をのばせばその薔薇色の頬に触れることが

できるところにいたが、そうは思えなかった。マーレオン大劇場の三階一番奥の席から、芝居を見ているかのようだった。芝居にはいずれ幕が下りる。幕が下りて化粧を落としたら、女優はどんな顔を見せるのだろうか。

私はその顔を見たくなかった。この仕事を引き受けたのは間違っていた。

駆け足で世界を一周し、私の話は終わった。マケナットは卓子に突つ伏して寝ていたが、時々顔を上げては恨みがましい目で私を見た。

「そんなわけで、怪しげな魔道探偵とやらの誕生さ。僕の話はこんなところだ。そろそろ君の相棒を寢床に放り込んだ方がよさそう

だ。明日も早い」

「私の話は聞いてくれないのね」

少しだけすねたような芝居があった口調でウエグは言った。「君はアブリュード宝石商会の女主人で、サンジェリイ社交界の花、〈ヴァアラナの花〉だ。一等書記官候補の旦那がいて、男前の愛人もいる。才知と美貌、それに有り余る富を持っている。金に困つた探偵を雇うことなど容易いことだ。僕が知っているのはそれくらいだが、他に何か話しておくことがあるかい」

一瞬、ウエグは怒気を含んだ赤い目で私を見た。それから、酒杯に残っていたメクサーラを寝ている愛人の頭に注いだ。

ぼんやりとした顔で何ごとか言っている若い絵描きを無視して、ウエグは立ち上がった。

「私のことは良くご存知のようね。おやすみなさい」

〈ヴァアラナの花〉は高そうな香水の残り香を残して部屋を出て行った。目を覚ましたマケナットは私に向かって、恨み言をもぞもぞと口の中でつぶやくと、ウエグの後を追って行った。

翠帳の間には、空になった幾つもの酒杯とほとんど手を付けられない料理、情けない探偵が一人、それと若い画家が忘れていった画帳が残された。

私は固い厚紙の表紙のついた画帳を開いてみた。マケナットに美人画描きとしての才能があるのは明白だった。墨一色で描かれたウエグの姿はどれもなやかで品の良い色香を漂わせていた。寝床の上で服を脱いだ彼女の姿を描いたものも、幾つかあった。絵の中のウエグは、自らの魅力を知り、自信に溢れた表情をしていた。

私は硝子の酒杯に残った薄黄色の酒を少しすすった。仙人掌の酔の物や、辛い腸詰を肉叉の先でつついてみた。

私は画帳を閉じ、自分の部屋に戻り、狭い寝床に潜り込んだ。ウエグと寝る夢を見た。夢の中のウエグは「ヴァラナの花」ではなく、昔の私の恋人だった。ひどく嫌な汗をかいて目が覚めた。

3

翌朝はひどい霧だった。このあたりではめつたに霧などでないはずだったが、乳色の深い霧が立ちこめ、二十イート（約六メートル）も離れると、相手の顔すら判別し難かった。

隊長が警戒を怠るなと下知し、奇妙な隊商は霧の中で出発の準備を整えた。

私は寝不足で、頭が重かった。霧で満たされた湿った空気が、かえって気持ちのいいものを感じられた。

隊商は列を組んで、街の門を出て行った。門の向こうには、荒野から昇る朝日が見えるはずだった。陽光は厚い霧に遮られて、鈍い橙色のぼんやりとした固まりのように見えた。霧は朝日にも頑強に抵抗し続け、消え去ることはなかった。

私達は濃霧の中、白銀街道をサンジェイイへと向かった。私はいつも通り黒塗りの馬車の後ろについたが、馬車からは何の気配も伝わっては来なかった。

ケルクスラドジアドボルジェクレーゼンが、側に馬を寄せ、小声で話しかけてきた。

「昨日はお楽しみか、スナブ・ランケン」

「ああ、この霧と同じくらい謎めいた夜だったよ」

傭兵隊長は油で固めた口髭の端を少しだけ上下させて、皮肉な笑みを漏らした。

「この霧は怪しい。街道のこのあたりで、こんな霧に出くわしたことはない。〈紫電の犬〉には、その名の通り、雷を自在に操る魔道士がいるという。霧を支配できたとしても不思議ではなからう」

「そうかもしれないな」

「おぬしの魔剣は何と言っている？」

隊長はどこから聞き込んできたのか、私がファバーン剣を持っているということを知っていた。太古の英雄から偶然譲り受けた魔剣は、三千年の歳月の内にほとんどの魔力を失っていたが、周囲の妖しの力を感じ取り持ち主に伝えることができた。まれに活性化して不可思議な力を発揮することもあったが、こちらの方は、期待してはいけないものだった。

剣の柄頭からは微妙なしびれにも似た感覚が伝わってきた。おそらくこの霧には何らかの魔道の力がかかわっているのだろう。

「何かある、と言っている」

私の答えに隊長はいぶかしげな表情を隠さなかった。

「その剣はしゃべるのか？おぬしに心の言葉で語りかけるのか？」

面倒な質問には答えずにすんだ。斥候からのものらしい叫び声が湿った空気の中に響き渡ったからだ。

「敵襲！敵襲！敵襲！」

霧の帳の向こうから、ひゅんひゅんという風を切るような音が聞こえてきた。黒い筋のようなものが霧の中から現れ、私の前にいた男の首にあたった。しゅつという音をたてて男の首が飛び深紅の噴水があがった。首に絡まって黄色い石畳の街道に落ちたのは、両端に鉛の固まりがついた細い鉄の縄だった。東部のヴォナツハ族が使う〈飛び鉄線〉だ。

ひゅんひゅんという音は幾つも幾つも重なって聞こえてくる。

「頭を下げる！〈飛び鉄線〉だ！頭を下げるんだ！」

私より一瞬早く隊長が叫んだが、くぐもった悲鳴が幾つも霧の中から聞こえてきた。視界の効かない中、ヴォナツハ族の飛び道具は幾つもの命を奪っているらしい。

「頭を下げる！〈飛び鉄線〉……」

二回目の隊長の警告は、途中で終わった。霧の中から忽然と現れた鋼の縄が馬の首に食い込み、彼を落馬させたからだ。

「くそ！下馬しろ！下馬して頭を下げるんだ！」

地上に転がりながらも、隊長は命を下した。だが、これは間違いだった。馬から下りて動きの鈍った敵に襲いかかるのが、ヴォナツハ族の戦法だからだ。

四方から蹄の音が聞こえてきた。姿は見えない。ただ、蹄鉄の音が迫ってくる。

私はファバーン剣を抜いた。刀身に刻まれた古代の神秘文字が緑色の光を放っている。この霧が魔法の産物であることは間違いないかった。

突然、霧が晴れた。まるで曇った硝子を拭いたようだった。

私達のまわりには色とりどりの装束をまとった盗賊団が迫っていた。四方を取り囲まれている。ヴォナツハ族の盗賊団というわけではなく、様々な面持ちの手合が軽い革鎧や鎖帷子を身につけ、短めの槍を構えている。ごく近くから投げられた短槍が馬から下りた傭兵たちを狙い打った。幾人もの男が串刺しにされて、地上に倒れ伏す。槍を投じると次の瞬間には、反り身の刀を抜き放ち、襲いかかってくる。

「馬車を守れ！馬車だ！」

隊長の叫び声が聞こえたが、あたりはあつという間に混戦となり、組織立った反撃と防衛はほとんど不可能だった。

ケルクスラドジアドボルジェクの傭兵たちはよく訓練された強者ぞろいだった。奇襲の衝撃から立ち直ると、盗賊団との激しい戦いが展開された。魔法の霧が晴れた後には、鮮血の赤い霧と蹄

と長杓が巻き上がる黄色い土埃が宙を埋めた。

黄色と紫の首巻きをなびかせた盗賊が、未だ持っていた槍を投げつけてきた。ぶんといい鈍い音を立てて、鋼の穂が迫る。ファバーン剣でたたき落とすと重い衝撃が腕に伝わる。魔法の槍ではないようだった。

槍を払って一瞬構えが崩れた隙をついて、盗賊は突っ込んでくる。頑丈そうな彎刀が鋭い弧を描いて脇腹に迫る。

ファバーン剣と盗賊の刀がぶつかり合って火花を散らした。奴が馬主を廻らせる間に私は隠しから短刀型の手裏剣を引き抜き、投げつけた。黄と紫の首巻きを真っ赤に染めて、奴は馬から崩れ落ちた。

間髪置かずに次の敵が背後から迫っていた。突き出された切っ先が革の外套に突き刺さる。身を捻って、左手の手甲で盗賊の顔を殴りつけた。鼻血を吹き出す敵を尻目に馬を回して斬り込んだ。革鎧の下の赤い服をどす黒く染めて、奴は死んだ。

さつと周囲を見回すと、〈白狼隊〉と〈紫電の犬〉は五分と五分の戦いを繰り広げているようだった。かなりの兵たちが倒れているようだが、刃を交えている盗賊もほぼ同数に見えた。

隊長ケルクスラドジアドボルジェクは、黒塗りの馬車の横に陣取って血みどろの剣を振るい続けていた。足下には斬り倒した盗賊の死骸が折り重なっている。血飛沫をあびた細い髭から血玉が滴り落ちるのが見えた。

その時、何か異様な冷たい気が押し寄せてきた。隊列前方から長く尾を引く悲鳴が聞こえてきた。剣戟の中で倒れた者の声とは違う、深い恐怖と暗い絶望を響かせた奇怪な悲鳴だった。

黒い影が土埃の中から忽然と現れた。長身の刃を引っさげ、黒い引回しをまとっている。革の胴鎧と洋袴は灰褐色、長杓は黒、伸ばした黒い髪を頭の後ろで縛っている。頬のこけた角張った顔には、眉間に深い皺が刻まれ、下唇を突き出したような口には不敵な笑いが浮かんでいた。

男は隻眼だった。左目を黒い眼帯で隠し、その上下には大きな傷跡がある。残った右目が、重たげなまぶたの下で鉄色の冷たい光を放っていた。

右手にだらりと下げた反り身の剣は、見慣れぬ意匠の業物で、刀身には佶屈怪異な見知らぬ文字が刻み込まれている。すでに幾人も命を奪っているらしく、男の右手と黒い鍔は血にまみれていたが、不思議なことに刀身には一滴の血もついていなかった。

この男が噂の魔剣の使い手なのだろうか。ファバーン剣はまだ何の感覚も伝えては来ない。

隻眼の男は馬車の前に立ちふさがるケルクスラドリアドボルジェクローゼンにゆつくりと歩み寄った。旧知の人間に街角で出会ったかのように、ぶらりぶらりと歩を進めた。

「貴様が吸血の魔剣の使い手か！」

口髭の血を拭って隊長が言った。

「だったら、どうする。尻尾を巻いて退散するか？俺の魔剣の餌食となれば、ただ死ぬだけではすまんぞ！」

男は低いしゃがれ声で答えた。恫喝になれている者の口調だった。隊長がそんなものに怯むことは考えられなかったが、男の放つ冷たい死の気配に絶えられなくなる者もいた。

「きえーい！」

どこか調子のはずれた声をあげて、一人の傭兵が斬りかかった。剣先が男の肩に届こうかというその刹那、男の持つ剣が動いた。そう、男が動いたのではなく、まず剣が先に動いたように見えたのだ。

反り身の刃は傭兵の胸板に突き刺さり、反対側にニイト（約六十センチ）も飛び出した。

男はすぐには剣を引き抜かなかった。冷酷な薄笑いを浮かべて、剣を突き刺したままにしていた。

傭兵の喉からは、世にも恐ろしい長い長い悲鳴がほとぼり出た。心の臓を一突きかと思えたが、そうではなかったのか、彼は全

身をかくかくと震わせ、口から血の泡を噴き、恐怖と絶望の悲鳴を上げ続けた。

ファバーン剣を握る手に痺れるような感覚が伝わってきた。刀身のファバーン文字は緑色の光を放っている。今、ここで、魔道の力が働いているのだ。

串刺しにされた傭兵の顔は見る間に灰色の萎びた木乃伊のようなものとなり、悲鳴が途切れた。隻眼の男が剣を引き抜く。わずかに噴き出した血が刀身からみつくように吸い込まれて消えた。傭兵の体は硬直して倒れると、素焼きの像のように割れて砕けた。魔剣に刻まれた呪文らしき文字が紫色の光を放った。

「見たか！この俺こそが妖刀ヴラザックの使い手、ドグゴードだ！次の餌食はどいつだ！言っておくが、血を吸われるだけとは思わないよ。この剣は魂も吸い取る。永遠にこの刃の中に閉じ込められ、斬られた時の恐怖と痛み苦しみを味わうことになるのだ！」

隻眼の剣士の脅し声は堂に入ったもので、歴戦の傭兵たちも動きを止めた。目の前で奇怪至極な魔剣の力を見せつけられれば、致し方はない。

だが、私は別の理由で、その場を動けずじまっていた。男が名乗ったドグゴードという名前には聞き覚えがあった。陰鬱な幽鬼のような男の顔をよく見れば、なじみ深い面影が残っているような気がした。

「誰も来ぬならば、こちらから行くぞ」

ドグゴードと名乗る男は、ぶらりぶらりと妖刀を下げてまま、黒塗りの馬車に近づいて行った。

「化け物、死ねい！」

静寂を破り、若い傭兵が右手から突っ込んだ。さらにもう一人が叫びながら左手から突進する。

黒い引き回しがぶわっと膨らみ、その中を紫色の閃光が走った。一番目の傭兵は首から肩を袈裟懸けにされ、二番目は返す刀で腹を引き裂かれた。首筋を斬られた若い男の傷口からは噴水のように血が噴き出した。

驚くべきことが起こった。宙に舞った血飛沫はまるで磁石に引かれる砂鉄のように、魔剣に引き寄せられ、吸い込まれた。腹を斬られた男からこぼれ落ちたはらわたは、自ら意志があるものかのようになり、妖刀の刃にからみつき、脈打ちながら血を送り込んだ。

隻眼の男が剣を引き抜くと、二人の傭兵の干涸びた死骸は音をたてて割れ落ちた。

「貴様、貴様、よくも俺の兵たちを……!!」

ケルクスラドリアドボルジェクーンが怒りに顔を朱に染めて、死骸の山を飛び越えた。冷徹な現実家ではあったが、配下の兵を思う気持ちは、決して計算だけのものではなかった。

傭兵隊長は魔剣の主に走り寄った。私はそれを邪魔して、二人の間に割って入った。

「何をする、ランケン！こいつは俺が斬る！」

激昂した隊長は今にも私に斬りかかってきそうな勢いだった。

「すまない、隊長。だが、こいつとの因縁は私の方が深そうだ」

私はもう一度、魔剣の主の顔を正面から見た。相手も眠そうな隻眼を私の顔に向けた。

「そうか……やはりそうか、スナブ・ランケン、久しぶりだな」

「ドグゴード、間違いないのだな」

隻眼の男は、左端が上がった唇に歪んだ笑いを浮かべた。

私には浮かべるべき笑いは思いつかなかった。

目の前にいる隻眼の剣士は、かつてスレプクレージュ剣術学校で腕を競った男だった。幾度となく木剣を交え、酒を酌み交わしたこともある。剣の腕は五分と五分、無論私は自分の方が上だと思いい、彼はそうではないと思っていた。

剣術では五分だったが、他の面では私たちは対照的だった。私は父親のわずかな遺産とわずかな偉功でかろうじてシユヌベル大学に籍を置き、古びた歴史を学んでいた。ドグゴードはサンジェリイ民議会の有力者の息子で、欲しいものは何でも手に入れた。スレプクレージュ剣術学校に入ったのも、彼の身を飾る花を一つ増やすため

だけのものだった。

「そうか、大都サンジェリイで評判の魔道探偵とはおまえのことだったのか」

旧友は、左目を奪った刀傷のために引きつった唇をさらに歪ませた。

「意外な出会いなのは、お互い様のようだ」

私の言葉が気に入らなかったのか、ドグゴードは怒気を含んだ片目でにらみつけた。

「俺は貴様に一番大切なものを奪われた。二度と貴様に俺の邪魔はさせん！ホライウオードの女神は頂く！」

緑玉の彫像はそういう名で呼ばれているらしい。

ドグゴードは妖刀ヴラザックを振りかざし、襲いかかってきた。私はファバーン剣でその刃をがつきと受け止めた。二振りの魔剣がぶつかりあい、奴の剣からは紫色の炎が燃え上がり、私の剣からは緑色の光が明滅した。

私とドグゴードは互いの剣に渾身の力を込め、激しい鏝迫り合いとなった。異界の力のぶつかり合いからだろうか、きな臭いような、血なまぐさいような、ひどくいやな臭いがした。

かつて、剣術学校で木剣を交えた時の記憶が蘇った。あの時は乾いた日向の匂いと汗の匂いがしていた。

ドグゴードの重たげなまぶたの下の隻眼には、暗い嫉妬と憤怒の炎が見えた。私は彼に気圧されるように後退った。刃を合わせているだけでも紫に光る妖刀に活力を吸い取られていくような気がした。

「化け物め！」

隊長が横合いから斬り込んできた。ドグゴードは一声うなると異様な力で私を突き放し、すんでのところで隊長の剣先をかわずと、逆に打ち込んだ。紫の魔剣が銀色に光る鎖帷子を引き裂き、短い悲鳴があがった。兜の虹色の羽飾りが揺れて、ケルクスラドリアドボルジェクーンはくずおれた。

周囲にいた数人の傭兵がいつせいにドグゴードに斬りかかった。紫の光の弧を二度三度描くと、血飛沫をあげて腕が、脚が、首が飛ぶ。隻眼の男はそのまま勢いを止めずに、黒塗りの馬車の扉に手をかけようとした。

私は痺れる手にファバーン剣を握りなおし、斬りかかろうとした。

その時、馬車の扉が勢いよく開き、光る銀の刃が飛び出した。ドグゴードは身をのけぞらせて、飛び退った。

「ドグゴード、あなたに私が斬れる？」

ウエゲナー・ダインが宝石を散りばめた銀色の短剣を手に、馬車から降り立った。黒衣に包まれた胸を突き出し、女王然として隻眼の男に冷たい青い目で視線を送る。黒水晶と銀の耳飾りが小さく揺れているのは、風のせい、彼女が震えているわけではなかった。

「ウエグ……」

ドグゴードはかすれた声でそうつぶやくと、妖刀の切っ先をゆつくりと下げた。それから、喉の奥で押さえ込んだような笑いをもらすと、踵を返してぶらぶらと歩き出した。

「引き上げだ！」

一声叫ぶと、馬に飛び乗り、黄色い砂塵の中に姿を消した。残っていた盗賊たちも次々に後を追って消えていった。

ウエグはまだ銀の短剣を持ったまま、隻眼の男が消えていった荒地の向こうを見つめていた。一陣の風が吹いて栗色の髪をかき乱すと、剣を取り落とし、膝を折ってその場に倒れ伏した。

命を落とした者が五名、戦えない傷を負った者が五名、倒した盗賊が八名、それが戦いの結果だった。死んだ傭兵はその場に埋葬され、盗賊の死骸は、禿鷹か荒地の地中に棲むという屍食鼠の餌と

なるべく街道脇に放り出された。

魔法の霧と妖刀による奇襲を受けたにしては犠牲が少なかったというべきなのかもしれないが、次の襲撃を跳ね返すことができるのかは、誰にもわからなかった。

軍議は走る幌馬車の中で行われた。馬車の中は若干の食料や衣類が積んであるだけで、ほとんど荷はなかった。

ウエグと絵師ディタモンナ・マケナット、私、〈白狼隊〉の副官を務めるラヴォージという禿頭の男、それに傷を負った隊長が参加した。

ケルクスラドジアドボルジェクレーゼンの傷はさして深いものではなく、傷の手当にも慣れた部下たちによって十分な治療をなされていたが、土気色の顔は瀕死の重傷を負っているかのようだった。

ウエグは短い卒倒からすぐ立ち直り、隊をサンジェリイに進めるように強く命じた。その上で、この馬車の中での軍議となったのだ。

「サンジェリイまでは、後わずかです。このまま隊を進めれば、夜には〈勝者の門〉にたどりつけるでしょう。盗賊団は警邏隊や軍隊の目が光るサンジェリイ近郊での襲撃は避けるはずですよ」

アブリュード宝石商会の女主人、我々の雇い主は、断固とした口調でそう言った。そう、ウエグは昔から気が強かった。

「確かに大都まではわずかな道程だ。しかし、盗賊団が先刻の襲撃であきらめるかどうか。手傷を負った分、確かに獲物を得ようと次の襲撃を考えている可能性がある。今一度魔法の霧か、あるいは喧伝される雷の術を使ってくることもあり得る」

禿頭の副官ラヴォージが静かな反論を試みた。

「それでは、ラヴォージ殿はいかなるお考えをお持ちか」

禿頭の男はつかの間眉間にしわを寄せ、不快そうな面持ちを見せた。だが、すぐに冷静な表情に戻り、策を語った。

「カッシュマーに戻り、態勢を立て直すのが懸命かと考えます。兵の補充も幾らかは可能かと。サンジェリイに伝書使を送り……」

「それでは間に合いません」

発言をさえぎられて、ラヴォージは鼻を鳴らして不満をあらわした。

「すでに王宮には明後日には献上に上がれることを伝えてあります。エイマン陛下との約束を違えることはできません」

我々の女主人に、自分の意志を曲げる気持ちはなさそうだった。

「しかし、〈紫電の犬〉の襲撃に持ちこたえられるかは……」

「恐いのですか？名だたる〈白狼隊〉が、荒れ野の野盗を恐れるというのですか？」

副官は禿頭を朱に染めて、憤怒の感情を隠さなかった。だが、彼が口を開くのを隊長が制した。

「ラヴォージ、契約には期日の件も含まれている。契約は守らねばならぬ」

ケルクスラドリアドボルジェクレーゼンの色褪せた唇から出た声は、少しばかり震えているように聞こえた。妖刀ヴラザックは与えた刀傷以上の見えない深手を確かに与えるようだった。

「しかし……」

「契約を守る、それが我らの一番の売り物だ。それにカッシュマーには盗賊団の密偵が潜り込んでいる可能性がある。我らが夜明けに発つことを盗賊どもは知っていたのかもしれない」

ラヴォージは口をつぐんだ。

「しかし……」

今度は隊長が同じ言葉を口にした。

「契約を遂行するには、そのために必要な事柄は知っておかねばなりません。ウエゲナー・ダイン様、貴女とドグゴードなる盗賊の首領、それに探偵スナブ・ランケンの間には、浅からぬ因縁がお有りのようなのだ。現にドグゴードは、貴女の姿を見るなり引き揚げています。仔細をお聞かせ願いたい」

ウエグの白い肌は怒りと当惑で赤く染まり、青い双眸は恐ろしい光を発して傭兵隊長を睨めつけた。

「そのようなことは、おまえが知るべきことではない！」

女主人は決めつけたが、隊長は動じなかった。

「契約の遂行に必要な事柄は、雇い主から与えられること、これも契約の一項に入っています。我々〈白狼隊〉はこの種の裁判沙汰でも百戦錬磨であることは、お聞き及びかと」

ウエグは愛らしい鼻孔をふくらませて、さらなる怒りの表情を見せたが、有効な反論は思いつかないようだった。

「僕から話をしよう」

私はウエグの目を見ないでそう言った。

「我々三人はサンジェリイのスレプクレージュ剣術学校での旧知の仲だ。彼女も短い間だが、剣術学校に籍を置いたことがある。僕とドグゴードは剣術の腕を競う好敵手だった。同時に……」

私は言いよどんで、ウエグの目を見てしまった。氷のような青い瞳は、こころなしか潤んでいるように見えた。面持ちは氷の像のように固かった。

「……同時に、僕とドグゴードは彼女を争った。剣術では五分だったが、この勝負は僕が勝った。ドグゴードには他の事情もあって、サンジェリイから離れた。それからのことは僕にはわからない。長い月日を経て今日再会した。そういうことだ」

ウエグは私の方を見ずに、刺のある声で話を補った。

「あの男は私たちを逆恨みしたあげくに、父親が民議会で失脚したのに絶えきれず、サンジェリイから逃げ出したのよ。情けない負け犬よ。もつとも逃げ出した男はもう一人いるようだけど」

私は黙って肩をすくめた。反論すべきことはなかった。私はまだ見ぬ遠い世界を旅したいという欲求によって、結婚を迫るウエグを捨てて放浪の旅に出たのだから。

「すると、あの魔剣の男―ドグゴード―は、今でも二人に恨みを抱いていると？」

「そんなことは知らないわ。今日だって、私の顔を見ておめおめと逃げ出したでしょう！どんな魔剣を持っていったって、負け犬は負け

犬なのよ！ケルクスラドジアドボルジェクレーゼン、心配はいりません。あの男にもう一度私の顔を見に来る勇氣などありはしません！」

会わなかった長い歳月のうちに、彼女の気の強さは、倍ぐらいになつたようだった。

傷を負つた隊長は、ひどく年老いたような渋面で私に尋ねた。

「ランケン、おまえはどう思う？奴はかつての恋敵を打ちに来るか？」

答え難い問いだった。恐らくはよほど数奇な人生をドグゴードは送つてきたと思われる。民議会有力議員の子息が今は盗賊の首領なのだから。

「わからないね。そんなことは誰にもわからない。ただ、奴は盗賊団の頭だ。その目的は遂げようとするだろう。傭兵が契約を成し遂げようとするのと、同じことだ」

隊長は土気色の顔で黙つてうなずいた。

5

隊商は歩みを止めることはなかった。もとよりそれはわかりきつたことだった。軍議の成果は、サンジェリイへの道筋に反映された。

ケルクスラドジアドボルジェクレーゼンは白銀街道から外れて、蛇骨街道と言われる別の道をとつた。さえぎるもののほとんどない白銀街道とは違って、巨大な蛇の肋のような奇怪な岩山が道の両脇に延々とそそり立っている。落石の危険から多くの隊商は避けて通るが、道程を考えればサンジェリイへの一番の近道だった。

距離の問題だけではなく、雷の術を敵が使つてきた場合、荒野の真ん中に行く白銀街道よりは、雷に打たれる可能性は低いという算段があつた。

隊商は昼過ぎに蛇骨街道へ入つた。林立する黄灰色の岩の肋は高さか三ノイート（約十メートル）を超えるものもある。神話に現れる巨龍の骸の中を進んでいるかのようだった。実際、ここは古代の龍神の石と化した骸なのだと言張する伝承もある。

その昔、私とウエグはそうした言い伝えや古文書の中から臚に浮かび上がる幻に夢中になつていたこともあつた。私たちを結びつけたのは、スレプクレージュ道場での剣術ごつこではなく、そうした古の幻への憧憬だった。

軍議の後、彼女は私には一瞥もくれず不機嫌な表情で黒塗りの馬車に戻つた。馬車はがらがらと無粋な音をたてて走り続けた。

ケルクスラドジアドボルジェクレーゼンは一人馬に乗ることはできず、幌馬車の中に横たわつて旅を続けた。私は変わらず黒塗りの馬車の斜め後方についた。

〈白狼隊〉の中には、サンジェリイへの旅を続けることへの不満と不安があつた。誰もそれをはつきりと口にするとはしなかつたが、後半日でこの仕事が終わるといふ安堵感はどこにもなかつた。小さな石ころが肋の上から転がり落ちてきても、異様な緊張感が隊全体に走り、強ばつた表情で皆周囲を見回すのだった。

獺とした不安が現実になるのに、それほど時間はかからなかつた。

蛇骨の向こうの青空が次第次第に雲に覆われ、吹き抜ける風も冷たく雨気をはらんだものとなつた。白雲は陰鬱な鼠色となり、やがて緑や紫の色を帯びた雷雲となつていった。

最初の稲妻が走ると、隊商にどよめきが走つた。しばしの間をおいて、低い雷鳴が響く。

異様な速さで雷雲が空に渦巻き、続けて二度三度稲光が閃いた。雷鳴がほとんど間をおかず、鳴り響く。驚いた馬たちがいななきを上げた。

斥候からの知らせはない。だが、敵襲が間近なのは間違いなかつた。

また稲妻が走った。今度は閃光と同時に凄まじい雷鳴が鳴り響いた。右前方の細い岩山が落雷で崩壊し、砕けた岩が転がり落ちて来る。さらに閃光が走り、今度は左前方の蛇骨が砕けて、落ちて来る。

転げ落ちて来る岩を避けようとする者とそれを避けようとする者で、たちまちのうちに隊は混乱に陥った。

「静まれ！静まれ！隊列を崩すな！」

副官のラヴォージが怒鳴り声を上げたが、それは続けざまの雷鳴でかき消された。まるで隊商を包围するかのように四方に雷が落ち、脆い岩山を崩しているのだ。

私は紫電閃く空を見上げた。泥流のように渦巻く黒雲は、まるで生き物のようであり、蛸の触碗のように雲がのたくる度に、恐ろしい電光が地上へと走る。

行く手に垣間見える地平近くの空は青い。驚くべきことに、雷雲は我々の頭上にもみ広がっているようだった。

大粒の雨が降り始めた。黄色い乾いた地面に黒い染みが見る見るうちに広がる。蛇骨街道はあつという間に滑る泥の道と化した。

次の稲妻は岩山ではなく、地上に届いた。一組の人馬が湯気を立てる黒焦げの骸となり、周りにいた数騎がはじかれたように転倒した。稲妻は弓の名手のように、直接我々を狙い始めた。

隊商は大混乱に陥った。誰にも事態を好転させることはできなかつた。敵の姿はどこにも見えず、天からの光の矢が次々と人馬を打ち倒した。逃げ惑う馬たちは泥沼と化した道で蹄を滑らせて倒れ、混乱を倍加させた。

私は興奮する乗馬から何とか降り立ち、黒い馬車のすぐ脇に駆け寄った。運良く無事な何名かの傭兵が、馬車の周りに集まってきた。

「ラヴォージは？副官はどこだ？」

誰かが叫んだ。激しい雨音と雷鳴の中、少し離れたところから答えが返ってきた。

「ここだ！隊長を助けるぞ！」

見れば三十イート（約十メートル）ばかり向こうで、傷を負った隊長の乗る幌馬車は、馬が雷に打たれたあおりで横転し、むなしく回り続ける車輪が雨粒を弾いてしぶきを上げていた。

忠実な副官は、ずぶ濡れになりながらひしゃげた幌を切り裂いて、中にいる男の安否を確かめようとしていた。数名の兵がそこに加わった。

「隊長は無事だ！」

ラヴォージが大声を上げた。隊長が無事だからといって、活路が開けるわけではないことはわかっているだろうが、彼はそう叫んだ。

その時、ひととき激しい電光が閃き、同時にはらわたを震わすどーんという大音響が轟いた。

幌馬車と側にいた幾人かの人間が、ばらばらの黒焦げの固まりとなって吹き飛んだ。肉の焦げる臭いが広がり、雨に打たれてしゅうしゅうと白煙をあげる肉塊が、私の側にも飛んできた。その固まりは、判別はし難かったが、どことなく禿頭の副官の首のようにも見えた。

幌馬車は雨に打たれてぶすぶすと燃えくすぶる黒い残骸と化していた。

魔法の雷は容赦なく傭兵たちを襲い次々と打ち倒していった。何騎かが、そびえる岩山の合間に逃げ込もうとした。鈍い音がして彼らは短い投げ槍を胸から突き出して、倒れ伏した。

雷鳴と雨脚が少し弱まり、蛇の肋を形作る岩山の合間から、色とりどりの衣裳をまとった盗賊どもが悠々と姿を現した。

形勢は明らかだった。残っている傭兵隊は、黒塗りの馬車の周りの数人だけだった。

「見ろ、これがおまえたちの隊長の首だ。多分な」

ドグゴードは最後に岩山の中から姿を現すと、薄笑いを浮かべて幌馬車の残骸の中をまさぐり、焼けただれた首をつかみ出した。

「見ろ、派手な七色の羽飾りはどこにもない。洒落た口髭も焼け落ちた。ここにあるのは、髑髏に焦げた黒い皮が張り付いた代物だ。見ろ、これがおまえたちの隊長だ。これが人間の残骸だ」

隻眼の男は、焼け焦げた首を振り回し、その度に黒い薄皮のようなものが首からはがれ落ちた。

「勇猛果敢で知略謀略にも長けた傭兵隊長も、瞬きもせぬうちにこのような姿となる。皆、すべて、灰となるのだ」

ドグゴードの虚ろな声が、蛇骨街道に響き渡った。

自棄になった一人が隻眼の男に斬りかかった。稲妻とは違う紫の閃光が走り、血の雨を降らせて兵士は倒れた。流れ出る鮮血は、泥水と混じり合う前に、地面に突き立てた魔剣に吸い込まれていった。

もう一人は、わけの分からない叫び声をあげながら逃げ出した。泥の上で転んだところへ、投げ槍が突き刺さった。

〈白狼隊〉の残りはただ一人となった。名前は何と言っただろう、まだ二十歳そこそこの若者だった。青ざめた泥まみれの顔に恐怖を張り付かせて、震える手で剣を構えていた。

ドグゴードは、子どもが棒切れでも振り回すかのように妖刀をぶらぶらと振りながら、ゆつくりと近づいてきた。

「さて、残る一人はおまえだ。若造、どうする？打って出るか、それとも逃げるか、何なら〈紫電の犬〉の一員に加えてやってもいいぞ。傭兵よりは実入りがいい、波瀾万丈の人生が送れるぞ！ひどく短いものかもしれないがな！」

若い兵士は、恐怖のあまり反射的に斬り込みそうに見えた。

「動くな、何もするな」

私が囁いた直後、馬車の扉がいきなり音をたてて開いた。

「盗賊め！死ぬ！」

絶望的な声で叫びながら、マケナットが飛び出した。若い画家は絵筆ではなく、ふらふらと切っ先がゆれる長剣を握って、ドグゴードへ飛びかかった。

隻眼の盗賊はひどくゆつくりと剣を振るったように見えた。マケナットの右腕は根元から切断され、二度と絵筆を握ることはできなくなった。血煙の中から、若い傭兵が斬りかかった。ドグゴードは傭兵の剣を軽くないすと、返す刀で後ろから首筋に打ち込んだ。最後の傭兵は首を斬り落とされて、噴水のように鮮血を噴き上げた。

汚泥の中のたうち回る絵師に、ドグゴードは歩み寄った。

「白馬の騎士はどこにもいない。皆、泥水の中で死ぬのだ」

そう言っ、妖刀を画家の胸に突き刺した。細身の体をひくひくと痙攣させて、マケナットは息絶えた。血と魂を吸い上げる魔の刃には、禍々しい紫色の光が脈打つように明滅していた。

「戻ってくる勇気が良くあつたわね」

馬車から降り立ったウエグは、愛人の血まみれ泥まみれの無惨な死体を一瞥した。それから、きつと顔を上げてドグゴードの顔を見つけた。手には銀の短剣を握っている。だがその切っ先は、自らの白い喉に向けられていた。

「私に指一本でも触れたら、喉を突くわ」

魔剣の男は、無造作に一歩足を進めた。足下の泥のような黄ばんだ顔には、歪んだ薄笑いが浮かんでいた。

「今でも俺がおまえに惚れていると思っっているのか」

ざらざらとした声でドグゴードはそう言った。

雨はやみ、雷鳴も聞こえなくなっていた。雲間から陽光が射し、あたりを乾いた光で照らした。

妖刀ヴラザックが一閃した。鋭い音が岩の肋の中に銜し、銀細工の短剣が弾けとんだ。息を吸い込む短い悲鳴が聞こえ、ウエグナー・ダインは切り裂かれた衣装の胸元を押さえてかがみ込んだ。

「おまえには指一本触れておらぬぞ」

ドグゴードは喉の奥をならすような不快な笑い声を上げた。

私とウエグは（紫電の犬）の囚われの身となった。ドグゴードの忠実な部下たちが手際よく私たちを縛り上げ、無事だったもう一台の幌馬車に放り込んだ。

彼らは金目のものを物色し、黒塗りの馬車の中から、分厚い布地にくるまれたお宝を発見した。ドグゴードは目の前でこれ見よがしに錦の紐をほどき、緑玉の彫像を取り出した。

ホライウオードの女神は一イート（約三十センチ）には満たない大ききの艶やかに光る薄緑色の石像だった。素人目に見ても彫りが甘く形もぼんやりとしており、格別の価値のある彫像には見えなかった。短い巻き髪の女が短い腰布の裾をひらめかせている像で、女神像と言われなければ売笑婦の像とも見える。

「ふむ、エイマン王の考古趣味もたいしたものだな。噂ではナクシャツあたりまで探検隊を差し向けていると言うじゃないか。新興の宝石屋としては、それを利用しない手はないな」

ドグゴードは隻眼をウエグに向け、傷で引きつった顔に歪んだ笑いを浮かべた。アブリユード宝石商会の主人は、美しい顔を背けて黙っていた。

盗賊団は蛇骨街道を抜けて、細い山道を登っていった。エル・ゴ・ドナと呼ばれるその黄色い岩山には、かつては金鉱があったと言われていた。クアロニアン帝国の時代には、そこから掘り出される黄金が帝国の繁栄の支えになっていたとも言われる。だが、帝国滅亡よりも早く金は掘り尽くされ、鉱山は閉ざされた。あるいは、鉱脈を掘り進めるうちに恐ろしい何かを掘り当ててしまい、鉱山は滅んだという言い伝えもあった。

いずれにせよ、エル・ゴ・ドナは数百年誰も近づかない荒涼とした岩山のはずだった。

九十九折りの山道を登っていくと、岩だらけの斜面に張り付くように崩れかけた石造りの小屋が何軒もたっている場所に着いた。昔の鉱山町の廃墟のようだった。

さらに山道を登ると、黄色い巨大な岩の壁が目の前にそそり立つところへ出た。岩壁には大小幾つもの穴蔵がうがたれている。かつての坑道跡なのだろう。

（紫電の犬）はここを根城としているらしかった。ひよろひよると伸びた木には馬がつかながれ、煮炊きの跡も見えた。留守を守っていた少人数の男たちが一行を出迎えた。

「見ろ！ホライウオードの女神は我らの手にある！」

ドグゴードが緑玉の像を高くかざして叫んだ。盗賊どもがおうつ！と声をそろえて応える。

「おまけに生き神様も手に入れた！」

後ろ手に縛られたまま、引き出されたウエグは屈辱に蒼白となり、あらわな肩を怒りに震わせていた。盗賊どもからは、どよめきとともに野卑な笑い声も聞こえる。

「この女は金のなる木だ。いいか、手を出した奴はヴラザックの餌食だ！」

不満の声は聞こえてこなかった。妖刀の恐怖によるものか、統率力があるのか、ドグゴードは優秀なお頭なのだろう。

「ドグゴード、その男は何者だ？」

盗賊どもの輪をかき分けるように、杖をついた男が現れた。灰色の蓬髪に垢染みたぼろぼろの長衣、幾重にもなった数珠や骨や歯の首飾りをつけている。手にした杖はねじくれた灰色の木で、色褪せた黄色い総がついていた。しわの多い渋皮のような顔の中で、小さな黒い目が眼光鋭い。

「ザンダクラッド、こいつは少しばかり俺とは因縁がある。俺の好きにさせてもらおうぞ」

身なりからすれば、この初老の男が盗賊団お抱えの魔道士なのだろう。

ザンダクラッドは骨張った手で杖を握りしめ、さらに前へ進んだ。黒玉のような光る目が私とウエグに突き刺すような視線を送った。胸の辺りに何か冷たいものを差し込まれたかのような気分がし

た。

「その男はさつさと始末するに越したことはないぞ。その女もだ。とれる金をとつたら、即刻始末するのだ」

「頭は俺だ、我が師父よ」

ドグゴードの言葉にはあからさまな皮肉が含まれていた。仕事の成果に湧いていた盗賊団に重苦しい沈黙が広がった。

「好きにするが良い、我が高弟よ」

魔道士の言葉は、自嘲の響きと苦い毒をはらんでいた。

私たちは大きな広間のような広がりのある坑道の奥の牢に入れられた。広間は彼らの食堂兼集会所であるらしく、粗末な木の食卓が幾つか並んでいた。そこからさらに奥に伸びる洞窟があり、蟻の巣のように左右に幾つかの小さな岩室のようなものがあった。私たちは坑道を挟んだ左右の岩室に入れられた。入り口は固い木で作られた格子扉だった。

ウエグは唇を噛み、怒りを押し殺していた。壁の松明からの揺れる光が美しい横顔に深い陰影を作っていた。

私は彼女にかけるべき言葉が思いつかず、ただ黙っていた。ウエグも私の方を見ようとはせず、黙っていた。

どれほどの時が過ぎたのか、広間の方からにぎやかな声が聞こえてきた。遠慮のない笑い声と放歌高吟、盗賊どもは酒宴を開いているらしかった。さらに時が過ぎ、騒ぎが少しばかりおさまった頃、牢に近づく者があった。

「さて、昔の仲間が三人揃った。これからが本当の宴の始まりだ」

ドグゴードは部下の者に運ばせた料理と酒を、私とウエグの牢の中に置かせた。

「さあ、やってくれ！スナブ・ランケン、かつての我が好敵手よ！」

隻眼の男は上機嫌でそう言うてから、少しだけ間をおいて、次の台詞を発した。

「ウエゲナー・ダイン、かつての我が恋人よ！」

ウエグは葡萄酒の注がれた酒杯をドグゴードに投げつけた。金の蒔絵の入った小さな杯は、牢の格子戸に当たって落ちた。

「ウエグ、いったい何をそんなに怒っている？俺が盗賊になったことが不満だというのか？人生には無限の岐路があるんだ。俺の選んだ別れ道は、たまたまこのエル・ゴ・ドナの洞窟に通じていた。おまえの選んだ道はアブリュード寶石商会の女主人、いやへヴァラナの花だ。その道もたまさかこの洞穴に通じていたというわけだ。この奇遇をむしろ楽しもうではないか！」

隻眼の男は格子の隙間から杯を拾い上げ、手にした瓶から酒を注ぎなおし、そつと牢の中に置いた。

「汚らしい盗賊の酒が飲めるか！」

ウエグは青い瞳に怒りの炎を燃やして、もう一度杯を投げつけた。今度は格子に当たった酒杯から飛び散った酒が、彼女の方へふりかかり、白い肌にどす黒い血のような斑模様を作った。

「いかにも俺は盗賊だ。だが、ウエゲナー・ダイン、おまえもまた盗賊だ。この葡萄酒を醸した杜氏、その蒔絵の杯を作った職人、誰もおまえのような暮らしはしていない。おまえたちアイトーネ街の御殿住まいの連中は、無数の貧しい人間から、金と物と誇りを奪い取る盗賊だ」

ドグゴードは淡々とそう言いながら、もう一度杯に酒を満たした。

私は自分の前に置かれた杯から葡萄酒をすすった。どこかの隊商から奪った物なのだろうか、上等な酒だった。

「馳走になることにするよ」

「物わかりがいいな、ランケン」

かつての恋敵は、自分の酒杯を一つだけの目の辺りまで上げ、昔のように乾杯の仕草をした。私も同様にして、酒を干した。それから、出された料理を食べた。焦げ目のついた鶏肉も、フラマリ豆の汁も、芋の煮物も冷めていたが、妙に美味く感じられた。

ドグゴードは牢の格子越しに酒を注いだ。私も格子の間から手を

伸ばし、彼に酒を注いだ。奇妙な酒宴だった。

しばらく無言で私たちは酒をかわした。ウエグはじつと黙って、うずくまっていた。私たちには、何か話すべきことはあるのだろうか。

「その目はどうしたんだ」

私はようやくその台詞を喉から絞り出した。

「これか、これは東の玉座をめぐるくだらない戦いで、失った。イリヴァーツとシンデックの間で延々繰り返されている無意味な戦いだ」

私はその虚しい戦いに傭兵として参加したことがあった。幸いなことに私はその戦いに深入りしないだけの分別はわきまえていた。シンデックの白蠟館にあるという東の玉座を得る者は、メルカー全土、いや全世界を支配する皇帝プラジナーオになることができるという。

私はシンデック側に雇われていたが、戦いの大義などまったく信じてはいなかった。そもそもどのような戦いにも大義などはない。あるのは、無惨な人殺しだけだ。戦場の英雄とは、どうしようもない殺人者に過ぎない。

「俺はサンジェリイを出て以来、当て所もなくメルカーをさまよった。親父は民議会の金を着服した上、政敵を暗殺したと新聞に書き立てられた。最悪なことに、いや、それで良かったのだが、俺はそれが真実だと知っていた。おふくろは若い燕と逃げて心中した。そしてウエグ、おまえはいつの間にか新しい男を作っていた。サンジェリイに居場所はなかった」

「私のせいで、サンジェリイから逃げ出したとでも言いたいのか！あなたのお父様のことなんて、何の関係もないわ！私は、私は、自分が本当に求める男を選んだだけよ！」

光栄と言うべきなのだろうか、答えに窮する台詞だった。

少しの間、ドグゴードは黙っていた。それから、自分の酒杯にもう一つの酒瓶から、ディコンらしき黄金色の酒をなみなみと注ぎ、

一気に飲み干した。

「そうか、そうだろうな。だが、おまえたちは……」

隻眼の盗賊は、そこで言葉を飲み込んだ。

「俺は、東部で雇われ剣士として身を立てた。俺に残っているのは、剣の腕、アイトーネ街では女の花飾りと同程度しか役に立たない剣術だった」

ドグゴードは自らの半生を語り続けた。

「俺はいろんな奴に雇われた。宿場町のごろつき、娼館の女主人、新興の暗殺者組合、商家の大胆那……隊商の護衛を務めたこともある」

剣士は皮肉な薄笑いを浮かべたが、私もウエグもいつしよに笑う気にはなれなかった。

「俺は戦乱の打ち続く東部で剣の腕を認められた。戦で百人隊を任されたこともあった。イリヴァーツのライガン王のために剣を振るつたこともあった。イリヴァーツのサルブシュ法王の命を暗殺者から守つたこともあった」

彼と戦場で顔を合わせなかったのは、幸運というべきなのだろう。

「だが、どいつもこいつも屑野郎だった。我欲を隠すことをしない市井の徒の方が、幾らかはましかもしれない。まやかしの大義を振りかざして醜い欲望を隠し、大勢の人間を戦に駆り立てて屍に変える奴らに比べればな。」

「だが、俺はそのことに気がつくのに、時間がかかった。最後の戦いで、俺は傷つき片目を失った。ライガン王は俺をイリヴァーツと通じた裏切り者として、荒野に放置した。通りかかったサルブシュ法王の軍勢は、俺を見なかったことにして通り過ぎた。命の恩人を見殺しにしたのだ。」

「俺は血まみれ泥まみれで、戦場をさまよった。あたりは死体だらけで、肉の腐る臭いがしていた。俺の体も同じ臭いがしていたに違いない。傷口からは膿がじくじくと流れ出していたからな」

食事中にふさわしい話とは思えなかったが、私は出された物を食べ続けた。ここから抜け出すための力をつけておきたかった。ウェグにも目顔で食べることをすすめたが、彼女はその気にならないようだった。

「倒れて気を失い、冷たい雨に起こされた時、目の前に洞窟があるのを見つけた。ただ、雨がしのげる、そう考えて俺はその小さな岩の割れ目に這うようにして入った。」

「洞窟の中には不思議な紫の光で照らされていた。奥の方に石で作られた祭壇のようなものがあって、ぼろを着た男が何か儀式のようなことをしていた。祭壇の前には死体が折り重なり、男はその死体から血や臓物をかき出して、祭壇に捧げていた。」

「祭壇には、荒く彫られた奇妙な像があった。苦悶の表情を浮かべる倒れた男の胸に、一振りの剣が突き刺さっている。剣を握って突き立てているのは骸骨だ。男は石でできた刀身に血を塗り付け、はらわたをこすり付けては、低い声で呪文を唱えていた。」

「俺はよろよると歩み寄った。男が何か叫んだが、耳に入らなかった。俺は吸い寄せられるように祭壇の彫像に近づき、石の剣に手を伸ばした。俺の血まみれの手が剣に触れると、紫の閃光が走った。剣に貫かれた男の像も剣を握った骸骨の像も、ばらばらに砕け散った。剣だけが俺の手の中に残った。それはもう石の剣ではなく、奇怪な紫色の光を放つ冷たい鋼の刃だった。」

ドグゴードはすぐ脇に置いた妖刀の柄をなでるように触った。「俺はヴラザックを手に入れた。ぼろを着た男―ザンダクラッドという魔道士―は、この剣を蘇らせるために様々な妖術を試みたが、効果はなかった。俺の中にある何かとこの剣は呼応して数千年の眠りから目覚めたのだ。」

そう、何かろくでもないものと呼び合ってしまったのだろう。恨み、憎しみ、怒り、虚しさ……。眠れる吸血の魔剣は、相応しい持ち主を見つけたのだ。

「俺の傷は深く、失った左目の傷口からは、血と膿が滴り落ちてい

た。他にも体中の傷が腐りかけていた。ザンダクラッドは薬と呪いで手当してくれたが、死が近いことは明らかだった。ザンダクラッドはこう言った。その剣で人を斬れ、さすればおまえの命は助かると。魔道士に言われる前から、何となくそのことはわかっていた。俺の手当をしてきているこの老人を斬り殺したいという衝動が、剣に触れるたびに沸き起こってくるのだ。」

「俺は剣を手を洞窟を出た。シンデックとイリヴァーツの小競り合いはまだ続いていた。どんよりとした雲の下で、両軍の兵士たちが無意味な殺し合いをしていた。俺の姿を認めたシンデック側の兵士が言った。ドグゴード、死んだと思っていたぞ、良かった、おまえが生きていてうれしいぞ、と。肩を並べて戦ったこともある気のいい奴だった。俺はそいつを斬った。溢れ出る血は一滴残らず呪文の刻まれた刀身に吸い込まれた。俺は体中に力がみなぎるのを感じた。」

「イリヴァーツの若い傭兵とも出会った。隊長殿、生きておられたのですねと、奴は髭のない顔をほころばせた。確かに俺の配下の部隊にいた奴だ。命を救ってやったこともあった。俺はそいつも斬った。ヴラザックが血を吸い終わると、俺の体には未だかつてない活力が溢れていた。傷はその夜のうちに完治した。さすがに目玉までは戻らなかったがな！」

ドグゴードは左目を覆う黒い眼帯を持ち上げてみせた。引きつれた傷跡の残るまぶたの中は黒い空洞だった。

「それから俺は、シンデックの白鷺城に忍び入り、卑怯者のライガンを王をこの剣で斬り殺した。奴は鼻にできた大きな出来物に薬を塗っているとこらだった。俺はまず、奴の鼻を切り落としてやったよ。感謝の言葉を述べてもいいはずなのに、奴はぎやあぎやあ騒ぎやがった。衛兵に駆けつけられても困るんで、喉を切り裂いた。盛大に血が噴き出したが、一滴残らずこの剣が吸い取ってくれたよ。家臣どもも後始末が楽だったろうよ。」

「あなたは頭がどうかしているわ！気が狂れているのよ！」

押し黙ってうつむいていたウエグが突然顔を上げ、金切り声で叫んだ。

「そうだな、そうかもしれない。だがな、俺よりもはるかに頭のおかしな連中が、お城や御殿の中にはたくさんいる」

ドグゴードは妙に落ち着いた口調でウエグの言葉を退けた。

「ライガン王を屠った後、俺はサルブシュ法王のカプダビート教会へおもむいた。サルブシュは深夜礼拝に没頭していたよ。まわりには、素っ裸の尼僧が何人も、それにデイコンの酒瓶が何本も転がっていたがな。俺はサルブシュの一物を斬り落とし、そいつを奴の口にくわえさせた。奴もぎゃあぎゃあうるさかったからな。それから首を斬り落とした。噴水みたいに噴き出る血が、宙で曲がってヴラザックに吸い込まれていく様は見物だったぞ！」

ウエグが耳をふさいで頭を振り、髪を振り乱して叫んだ。

「いい加減にして！そんな話聞きたくないわ！そんな話……」

言葉はすすり泣きが変わったが、ドグゴードは語るのを止めなかった。

「俺は二人の王を殺した。だが、自分が成り代わりたかったわけではない。東の玉座など、何の意味もない。俺は東部を離れた。魔道士ザンダクラッドと組んで、新島の盗賊団を組織した。正しく奪い取ることがこの盗賊団の目的だ。何の栄華も権勢も求めない。ただ、戦いと略奪の血の騒ぎに応えるために存在する。我らへ紫電の犬は真性の盗賊団だ！」

隻眼の男の虚ろな笑い声が洞窟の中に響いた。左目は、彼が失ったものの中で一番小さなものなのかもしれない。左目は、彼が失ったものの中で一番小さなものなのかもしれない。

「さあ、今度はおまえたちが話す番だ。この失われた年月の間に何があったのかをな！」

ドグゴードは牢の中の私とウエグの杯に酒を注ぎ足した。ウエグは今度は酒杯を投げつけることはしなかったが、罵りで応えた。

「人殺しの盗人に話すことなど、何もない！」

盗賊は、虚しい薄笑いを浮かべてデイコンをあおった。

「それでは、ランケンはどうだ？なぜ、おまえはあの魔剣を持つことになったのだ？なぜ、魔道探偵などというけつたいな仕事に就いているのだ？おまえはなぜ《ヴァラナの花》を手放したのだ？」

ウエグは膝を抱えて凸凹した床の一点を見つめていた。私には、答えるべき言葉はないような気がした。

「たまたま、そういうことになった、ということかな」

ドグゴードは乾いた笑い声を上げた。

「やれやれ、せっかくの再会だというのに、我が同輩は愛想がなさすぎる。たまたまだと！ランケン、おまえはこの歳月を偶然のままに生きてきたというのか！」

少なくともファバーン剣を手にした件に関しては、偶然だと私は思っていた。偶然起こった地震によって太古の神殿への入り口が開き、偶然蘇った古の戦士から、私はこの剣を受け取った。私は選ばれた勇士などではない。たとえ、古代の神殿が行きつけの酒場の地下に埋もれていてもだ。

「たまたま私を捨てて帰らぬ旅に出たって言うの！」

ウエグが顔を上げ、私をにらんで酒杯を投げつけた。私は言うべき台詞を間違えたようだった。

「僕はただ、見たことのない、いろんな世界を見たただけだ。そして、いろんなことを見過ぎた……のかもしれない。だから、きつと帰ってきたんだろう」

私の台詞はなおさらに間違っていた。

「私のところへは帰って来なかったわ！あなた達は二人とも逃げるのが得意な負け犬よ！」

いくら世界中を彷徨って無数の奇々怪々な出来事に遭遇しようとも、学ぶことのできなかつたこともあった。学ぼうとしなかつたと言うべきなのかもしれないが。

ウエグは押し黙って、床の一点を乾いた青い目で見つめ続けた。

私もドグゴードもひどく分が悪いようだった。

「寝ることにするか」

彼はぼつりとそうつぶやくと、奇怪な妖刀をつかんでふらふらと広間の方へ去った。盗賊どもも寝入ったようで、洞窟の中はしんとして音もなかった。松明が消えかかり、石牢の中は消炭色の闇が支配した。その中で、ただウエグの青い瞳だけが鬼火のように浮かんでいるような気がした。目をつぶって眠ろうとしても、鬼火は消えてくれなかった。

7

何かの気配で目が覚めた。廊下の松明は燃え尽きていたが、かすかな青白い明かりが広間の方から洩れている。夜が開ける頃なのかもしれない。

薄明かりの中で何か黒い固まりのようなものが、格子戸の向こうで動いていた。体が勝手に動いて剣を抜こうとしたが、フアバーン剣は奪われていたことを思い出した。

「目ざといな、スナブ・ランケンとやら」

黒い固まりが囁き声を出した。ザンダクラッドという魔道士だった。魔道士はねじくれた木の杖に、数珠や牙の飾りを巻き付け、何か儀式めいたことをしていたようだった。

私は自分がひどく気分が悪いことに気がついた。胃の腑がねじれるような不快感があった。向かいの牢からはウエグの小さなうめき声が聞こえた。

「何をした？」

「そう心配せんでも良い。おまえたちの素性をちと調べさせてもらった」

しわの中に埋もれそうな黒い目が冷たい光を放っていた。素性と云っても、普通の意味での氏素性とは違う何かなのだろう。

「何のために？」

「人間には様々な役立て方、使い道がある」

ザンダクラッドはそれだけ言うと、いやな含み笑いを残して立ち

去った。

「ランケン、何なの？」

ウエグがぼんやりとした声で聞いた。その声は昔、同じ褥で聞いた声と少しも変わらないような気がした。

「いや、何でも無い。風の音だ」

次の二日間は、何ごとも起こらなかった。質素な食事が朝と夕、運ばれてきた。牢番は無口な男で何もしゃべらなかつた。

二日目の夜、ドグゴードが現れた。

「喜べ、ウエグ、アブリユード宝石商会はおまえの身代金交渉に応じてきたぞ。業突く張りのお袋さんだったが、やはり娘の命には代えられないらしいな。百万ダズンの支払いに応じる気があるらしい」

ウエグは何も答えず、血走った目で彼をにらんだ。

「これから交渉だ。折り合いがついて金が手に入れば、おまえは解放してやる。せいぜい商売に精を出して失った金貨を取り戻すがいい」

ドグゴードは今度は私の方を向き、話を続けた。

「だが、ランケン、おまえはそういうわけにはいかん」

「身代金を払ってくれるような親戚はいないからね」

嫌みのつもりはなかつたが、言ってから後悔した台詞だった。

「私が払うわ。アブリユード宝石商会が、もう百万ダズンの身代金を払う。だから、ランケンを解放して」

固い口調でウエグが言った。

私もドグゴードもしばらく黙っていた。

「聞こえなかつたの！アブリユード宝石商会の主人の私が、百万ダズン払うと言っているのよ。署名付きの証文を書いてもいいわ。ランケンも解放して！」

ドグゴードは嘲笑するべきか、激昂するべきか、迷っているように見えた。結果的に彼は前者を選択した。

「いやいや、これは素晴らしい美談だ。〈ヴァアラナの花〉が昔の男

のために百万ダズンを支払う！新聞屋どもに売りつければ、また一儲けできるかもしれない！」

岩屋に響く虚ろな笑いを、ウエグの奇妙に穏やかな声がさえぎった。

「昔の男じゃないのよ。私は今でもこの人を愛しているのよ」

長い沈黙があたりを支配した。どす黒い色が見えるような低い声で、ドグゴードが沈黙を破った。

「ランケン、おまえは俺からすべてを奪った。どうやら今でも奪い続けているようだ。ウエグの見ている前で、最後の決闘といこう。俺はおまえを倒す。明日の朝には帰って来て、おまえの首をもらおうぞ」

私には、ドグゴードにもウエグにも、返す言葉がなかった。

盗賊の首領は、もう一度ウエグの方を無表情に見やって、立ち去った。

沈黙のうちに時間が過ぎた。盗賊どもの夜ごとの宴会も終わりを告げたようで、静けさがあたりを支配した。

洞窟の方から、短いうめき声と人が倒れるような音がした。かすかな足音をたてて松明の明かりの輪の中に現れたのは、魔道士ザンダクラッドだった。

ぼろを着た魔道士は左手にはねじれた木の杖を持ち、右手には鍵束を持っていた。

「ここを出るのだ、客人たちよ」

しわに埋もれそうな小さな黒い目から表情は読み取り難かった。

「ここを出てどこに？」

「ここにいても死を待っただけだということとは、わかっておろう。男はもとより、女もこの秘密の砦を知った以上は、ドグゴードが生きて帰すはずもない」

「おまえとここを出れば、生きる道があると言おうの？」

ウエグが思いのほか、強い口調で言った。

「さよう、おまえたちに生き延びようとする強い意志と星辰の定め

と合致する強運があればな」

星辰の定めとやらが何を意味するのかは、あまり考えたくなかったが、ここにこうしているよりは、何らかの道が開ける可能性はあるように思えた。

ザンダクラッドは、牢の鍵を開けた。私とウエグは目顔でうなずき合い、牢を出た。

「儂とともに来るのだ。煌めく星々が地の底に封じた定めが開けよう」

魔道士は先に立つて歩き出した。洞窟の出口とは反対方向へ。彼は背中に見慣れた剣を背負っていた。ファバーン剣だ。

私とウエグが次の言葉を発する前に、彼は答えた。

「闇に消える道が光に通じることもある。暗き顎の深奥に見える星々もある。この奇しき剣が導いてくれよう。魔道士が背中を見せたからといって、努々隙ができたなどと思わぬことだ。魔道士の目は顔についているものとは限らぬからな」

ザンダクラッドはそう言い残して、すたすたと先に歩き出した。私たちは、その後をただついて行くしかなかった。

石牢の先は急に坑道は細くなり、すれ違うこともできなくなるようになった。無論、壁に明かりなどは無い。魔道士は背中ファバーン剣を抜き放った。ウエグが息を吸い込む短いかすかな声を上げ、私はアニヤチの山奥で習った体術の構えをとった。

魔剣の刀身の神秘文字が、妖しい青緑の光を放ち、あたりを照らし出していた。ファバーン剣が何かの力を感じ取って道を示唆しているのか、無数の横穴や別れ道がある暗黒の坑道を魔道士は迷う様子もなく歩いて行く。空気は冷たく湿って動かない。乾いた熱い風が吹き抜ける地上とは、まったくの別世界がエル・ゴ・ドナの黄色い岩山の中に眠っていたのだ。

ウエグは私の引き回しの裾をつかんで歩いてきたが、だんだんとかむ位置が近づいてきた。私は少しばかりためらってから、彼女の手を握った。柔らかく暖かく滑らかな感触は、昔と変わらなかつ

た。彼女が身を寄せると、かすかに甘い女の匂いがした。

洞窟は曲がりくねり、上り下りもあったが、おおむね下へと降りて行くようだった。どれほど道を下ったかはわからなかったが、どんどん寒気が増す中でも、私たちの手のひらには汗がにじんできた。

狭くなる一方だった道が突然開けた。金色の妖しい光がそこには満ちていた。

高さと同行きが二十メートル（約六メートル）、差し渡しが三十一メートル（約十メートル）ほどある岩室がそこに広がっていた。卵形の部屋だったが、明らかに誰かが作ったものらしい。円柱を模したような跡が四隅にはあり、壁にも床にも天井にも、佶屈怪異な文字らしきものが彫り込まれていた。

私たちの右手（恐らくはこの部屋の正面と思われる）には、氷の壁のようなものがそそり立っていた。表面はほとんど平滑で濡れたように光っている。黄金色の光はその氷の中から発せられていた。氷のようなもの―硝子か水晶の巨大な固まりなのかもしれない―の中には、異様なものの姿があった。

金色の光を発する巨大な蛆か蚯蚓のようなものが、そこにいた。太さは三メートル（約九十センチ）ほどはあるのか。目も鼻もなく節状になった丸い体が長く続いている。短いものは十メートルほど、長いものは体が曲がりくねり絡み合っている。どれほどの長さがあのかかわからない。金色に輝く樽のように巨大な蛆虫が、何十匹と氷に封じ込められているのだ。

おぞましいことに奴らは生きていた。氷のような透き通るものに向こうで、ゆつくりと、本当にごくわずかずつ、蛆虫どもは体節のある体をくねらせ、蠢かしているのだ。

「見ろ、これがエル・ゴ・ドナの金山を滅ぼしたものだ。太古にこの山に封じられた妖蛆を山師どもは掘り当ててしまったのだ。この虫どもは金を産み出す。欲に目がくらんだ人間を呼び寄せ、自らの封印を解かせるために、奴らは自身の体から黄金を排泄するのだ。」

そして、長い長い年月を経て山の中を金で満たして行った。

「目論見通り、金の山に人々は吸い寄せられ、この虫どもを掘り当てた。だが、すべて思い通りというわけにはいかなかった。クアロニアン帝国の世にも、少しはましなものと考え方をする魔道士がいたらしい。蛆虫どもが復活する前に、この氷壁の中に奴らを閉じ込め、山全体を封印したのだ。」

「ドグゴードはこのことを知らない。単なる廃坑跡を秘密の砦にしていると思っっている。かすかな噂ぐらいは聞いたことがあるやも知れぬがな。今、奴の頭にあるのは、ホライウオードの女神をいかに高値で売り飛ばし、〈ヴァアラナの花〉からいかに高額の身代金をせしめられるか、そしてスナブ・ランケンとやら、おまえへの恨みをはらすことだけだ。」

「だが、儂はもう少し大きなことを考えておる。ホライウオードの女神にはもつとましな使い方があるし、おまえたち二人にももつとましな使い道がある」

ザングクラッドは、ぼろの中から錦織の袋に入ったものを取り出した。緑玉の女神像、ホライウオードの女神だ。

「これをあの若造もおまえたちも、ただの古代の遺物、少しばかり珍しい彫像だと思っっている。だが、この像はただの古い彫像ではない。ホライウオードの女神は解放の神だ。あらゆる束縛、禁忌、戒め、そうしたものを打ち壊し、魂の自由を約束する神だ。この神像にはその解放と自由の神通力が込められている。この神像はあらゆる戒めを打ち壊し、十全の自由をもたらす！この偽りの氷の壁の中に封じられているものにもな！」

「だが、彫像だけでどうこうなるものでもない。旧き神の裔を蘇らせるための十分な力を発揮させるには、生ける人間の犠牲が必要なのだ。ホライウオードの女神のように、自由と解放を求める新しい魂が必要なのだ。」

「おまえたちの魂はこの目的のためにはうつつけだ。昨晚、おまえたちの生魂を妖術の手により探らせてもらった。おまえたちは二

人とも、限らない自由と解放を求め、束縛と禁忌を破壊しようとする精神の持ち主だ。この目的のためにはうつつつけの魂だ。

「それにこの剣がある。これはファバーン文字だな、スナブ・ランケンとやら。儂にもこの文字は読めんが、この刃の奥には妖力の働くもとへ誘う不可思議な力が眠っている。底知れぬ力が眠っている。三千年前に海中に没した国の魔剣が、封印されたものの魂へと儂を導いてくれよう」

魔道士は奇怪な氷壁の前に、うやうやしい、だがおどけたような仕草で女神像を置いた。

「さて、早速とりかかるとしようか。あのうつけ者が騙されたと知って戻って来ると厄介だからな。幾ら盗賊稼業を重ねたとて、世界を真の渾沌に帰すことはできぬ。儂がその力を手に入れるのだ！」

「いいかげんにして！」

突然ウエグが叫んでザンダクラッドに飛びかかった。虚を突かれた魔道士は一瞬よろけて後ずさったが、意外にも動きは素早く、私が飛びかかるよりも早く、黄色い縲のついた杖を振りかざした。

「イ・ズカ！」

短い呪文が聞こえたかと思うと、杖の先から電光がほとぼしり、私とウエグを打った。ひどい痛みとしびれが体中に走り、私たちは岩室の中を駆け回った。

「つまらぬ気は起こさぬことだな。この洞窟の中でも雷の鳥の鳴き声は聞こえるのだ」

「ウエグ……大丈夫か……」

痺れた手を彼女の方にのばすと、かろうじて届いた。私たちは指を絡めて握りあった。

「ランケン……」

ザンダクラッドは氷壁の方を向き、あぐらをかいて座ると、鞘に戻してあったファバーン剣を抜き、床に突き立てた。刀身の神秘文字は、緑色の光を放っている。杖を両手で握り、口中で呪文を唱え

始めた。

「ランケン……私たちどうなるの……」

ウエグがかすれた声で囁いた。蒼白な顔には不安と恐怖があふれていた。抱きしめてやりたかったが、体は痺れていてほとんど動かない。安心させられる言葉も持っていなかった。

「わからない。あの剣の本当の力は僕にもわからないんだ。女神像や魔道士の呪文とどう反応するのか……」

私にできるのは、握った指先にほんのわずか力を加えることだけだった。

呪文は途切れることなく続き、次第に大きな声になっていった。一つ一つの音が妙にくつきりと聞こえる呪文は、東部でもあまり聞き覚えのない言葉で、もちろんまったく意味はわからなかったが、ところどころにスベルコ人風の響きも聞き取れるような気もした。

呪文が続くにつれ、地鳴りのような音が時おり聞こえるようになった。岩室全体、四方から低く重い唸り声のようなものが響いてくる。さらにそれに入り交じるように、金物をすり合わせるような、きいきいという耳障りな響きを持つ音が聞こえてきた。その音は外から耳に届いてくるのではなく、逆に頭の中から耳に響いてくるかのような、不快さを持つていた。

魔道士の呪文が一際高まると、ファバーン剣の神秘文字が鮮やかな青緑の炎を放ち、その光を吸い込むかのようにホライウオードの女神もまた強い光を放ち始めた。

「ランケン、見て、動いているわ！」

ウエグが低い悲鳴をあげた。氷壁の中で金色の蛆虫どもが、のたうっていた。かろうじてわかる程のわずかな動きだったものが、今や土の下より掘り出された蚯蚓のように、節のある体をくねらせ、氷壁の上へ下へと這いずり回っているのだ。

「アク・ナラット・スー・セクト、アク・ナラット・スー・サクト……見よ、エル・ゴ・ドナの妖蛆は贄を求めている。解放のための力となる生け贄を！おまえたちの魂を封じられたものに捧げよ！」

灰色の髪を振り乱したザンダクラッドは緑の光を発するファバーン剣を握り、ウエグににじり寄った。

「この剣が魂を吸い取る道をおまえたちの胸に開いてくれよう。ま

ずは女、おまえからだ。案ずることはない、その白い胸乳に少しばかり傷をつけるだけだ。見えない触腕が、そこから必要なものを吸い取るのだ！」

ウエグは笛の音のような悲鳴をあげて、必死で剣先から身を遠ざけようとするが、体はほとんど動かない。私は渾身の力を込めて魔道士の足につかみかろうとしたが、芋虫のように身を振らせることができなかつた。ファバーン剣が、私の剣が、ウエグの胸元に死よりも恐ろしい何かをもたらす傷をつけようとしていた。

ひゅんという空気を裂く音がした。ザンダクラッドが短くうめいて、肩口を押さえて倒れた。

「そこまでにしてもらおうか、我が師父よ」

旧き友の陰気な声が岩室の中に呟した。

「ドグゴード！貴様……」

魔道士の憎しみの声は、傷の痛みに耐えるうめき声の中にかき消えた。左肩に小ぶりの短刀が突き刺さっている。

「ジャアの毒だ。おまえに教えられた毒蛇だよ。じきに体中が痺れて何も感じなくなる。息ができなくなつて死ぬ。もう、反撃の呪文も唱えられないだろう」

ザンダクラッドは血走つた凄まじい目つきで、隻眼の男をにらみつけたが、震える唇からは白濁したよだれがしたり落ちるばかりだつた。

「俺がおまえの企みに気がつかないとでも思つたのか！とうの昔に、古株の何人かを抱き込んでいたのは、知っていたさ。だが、おまえがここで何を成そうとしていたのかは、わからなかつた。だから、偽の交渉に向いた振りまでしたわけだ。

「おまえに与した奴らはすでにヴラザックの餌食にした。最後におまえの血を吸わせてやる。さしもの妖刀も反吐を吐くかもしれんが

な！」

ドグゴードは紫色の光を放つ刃を瀕死の魔道士の首筋に突きつけた。

「この二人はおまえのおもちやにはさせせん。金塊を生む化け物など、俺には何の意味もない。だが、この二人にはまだまだ用事が残つてるんだ」

ザンダクラッドは何か言おうとしていたが、唇からは血の入り交じつた泡が噴き出るだけだつた。その時、きいきいという不快な音が一際高まり、妖蛆の動きが激しくなつた。私には声の出せない魔道士の口が、意味を持つて動いたように見えた。

ヴラザックが一閃すると、蓬髪の首が飛んだ。鮮血が吹き出したが、その血は妖刀の刀身には吸い込まれなかつた。魔道士の血は宙を滑るように動き、黄金の蛆虫を封じ込めた氷壁に吸い込まれて行つた。血反吐を噴いた魔道士の首には、ぞつとするような薄笑いが浮かんでいた。

術者の死によつて、私とウエグを縛っていた見えない力はすうつと消えて行つた。私はウエグに肩を貸し立ち上がらせると、ファバーン剣を握つた。

「ランケン、おまえを斬る！蛆虫どもの餌食となつて黄金の糞となれ！」

「そんな暇はないと思うね、ドグゴード。おまえの師父は、最後に自分の命をこの蛆虫どもに捧げたようだ」

氷壁に亀裂が入つていた。魔道士の血が吸い込まれた無数の点からひび割れが走り、そこから透き通つたどろりとしたものが流れ出ていた。地鳴りは激しくなり、黄金の長虫たちは、氷壁を突き破ろうとこちらに身を押し付けている。頭の中に響く甲高い声は耐え難いばかりだつた。

隻眼の男は、歪んだ唇を噛んで氷壁に目を走らせた。ひび割れが一気に大きくなり、数メートルはある氷のようなものが崩れ落ちた。硫黄のような悪臭とともに透明な粘液が大量に流れ出し、その中か

ら金色に輝く巨体が姿を現した。

太さが三イート（約九十センチ）はある蚯蚓の頭のようなもの、目も鼻もないつるりとした丸い頭の真ん中に、小さなへこみがあった。そこに一瞬しわが寄ったかと思うと、一気に広がり、巨大な肉の花のようなものが開いた。無数の尖ったひだを持つ桃色の肉花、これが奴の口なのだろう。

中心にぼっかり開いた黒い穴から何かが飛び出してきた。渦巻き状になった赤黒い固まりが幾つか現れたかと思うと、瞬時にそれは解けて、鞭のようにしなる何本もの触手となった。それは、一つ一つが別の命を持つているかのように、襲いかかってきた。

紫の光を放ってヴラザックが肉の鞭を斬り裂き、ファバーン剣が緑の光の筋となつて蠢く触手を斬り落とした。だが、すぐに次の渦巻き状の肉塊が奴の口から吐き出されてくる。

「見て！もう一匹が！」

ウエグの叫び声に見やると、別の場所の水壁が割れ落ちて、そこから悪臭を放つ粘液とともに、金色の頭が顔を出している。ひび割れは壁全体に広がり、すべての妖蛆が解き放たれるには、たいした時は要さないだろう。

「逃げろ！」

私もドグゴードも同時に叫んでいた。放浪の中で学んだことには同じこともあつたらしい。

ドグゴードが先に坑道に飛び込んだ。私はウエグの手を取り、すぐに後を追おうとしたが「待つて！」という声に引き戻された。

「女神像を！」

ウエグは崩れ落ちそうな水壁のすぐ前に転がっている緑玉の像に手を伸ばそうとしていた。

「そんなものはどうでもいい！」

叫んだが一瞬遅かった。赤黒い触手が二本、三本、ウエグの腕と体に巻き付いていた。

「ランケン！」

悲鳴よりもはやく、私は魔道士の死骸を飛び越え、ファバーン剣を振るつた。一本、二本、触手を切断する。白く粘つく汚液を噴き出し、蛇のようなそれはのたうち妖蛆の口の中に後退する。

三本目の触手を斬り払うと金色の蟲はもうすぐ目の前に迫っていた。私はその巨大な頭とおぼしき部分へファバーン剣を突き立てた。

途端に刀身の神秘文字がまばゆいばかりの光を放ち、異様な昂揚感のようなものが剣から流れ込んできた。妖蛆の発する金色の光をかき消すかのように、青みがかつた緑色の光が無数の粒のようになって広がり、怪物の体に突き刺さった。

奴の悲鳴なのだろうか、頭が割れんばかりのきいきいという声が響き渡り、金色の体の至る所に、ぼつくりと傷口が開いた。巨大な蚯蚓のようなものは、そこからどろどろと粘つく白い液を噴き出して動かなくなった。金色の光は急速に薄れ、汚らしい白つ茶けた斑の肌となった。

剣を引き抜くと、緑の光は弱まり、いつものような燐光となったが、何かまだ力のざわめきのようなものが残っているのは感じられた。もつと怪物を斬り裂きたい、そういう衝動がかすかに感じられた。それは剣から伝わってくるのだろうか、私の心中から沸き起こっているのだろうか、よくわからなかった。

ファバーン剣も妖刀ヴラザックも本質的には同じ性質を持つ魔剣なのではないか、という疑念が頭をかすめた。

「ランケン、その剣は……」

震えるウエグの声が、私を現実に引き戻した。

「古代の英雄とやらが、僕にくれた。中古品だが、時々こんな風に活性化する。だが、当てにはならない。それよりも、逃げることだ」

ウエグの白い腕には触手に巻き付かれた赤い痕が残っていたが、手にはホライウオードの女神をしっかりと握っていた。もう一匹の妖蛆の口が開き、渦巻き状の触手の固まりが顔を見せていた。私たち

は洞窟の中に走り込んだ。

洞窟の中は暗かった。無論松明などはなく、ファバーン剣も先刻のまばゆいばかりの輝きはどこへやら、ぼんやりとした薄緑の光を放つばかりだった。前方にゆらゆら揺れて見えるヴラザックの紫の光が、唯一の道しるべだった。

背後からは妖蛆の放つ金色の光が明滅していた。怪物は私たちの後を追って、狭い坑道の口に巨体を押し込もうと体当たりを繰り返しているらしい。ずしんずしんという大音響が背後から津波のように迫ってきた。頭の中には、相変わらず不快極まりない甲高い声が冪している。

私たちは前を行くドグゴードの魔剣の光を見失わないように、ひたすら足を動かした。ファバーン剣の緑の光は緩やかに明滅していたが、それが果たしてどんな妖魅の力に反応しているのか、魔道士ならぬ身にはわかりようもなかった。

後方からの低い音が一瞬止んだかと思うと、ぱりぱりがりという凄まじい大音響が轟きわたった。金を生む巨蛆が坑道を破壊しているのだろうか。巨体の妖蛆どもが皆解放されて洞窟を破壊し始めれば、エル・ゴ・ドナの黄色い岩山自体が崩壊するかもしれない。ザンダクラッドには、復活した妖虫どもを意のままにする目算があったのだろうか、口寄せ師でも呼んでこなければ、それを聞くことはできない。

絶え間ない地鳴りと揺れが続く坑道は、天井や壁面から大小の石塊が落ち、所々に入れてある支えの木組みは、不気味に軋む音をたてた。

握ったウェグの手には汗が滲み、不安に満ちた浅く速い息づかいが感じられた。だが、彼女は恐慌を起こさず、精一杯の足取りで前

に進んだ。

どれほど暗黒の道を歩んだのか、いつしか背後の音は薄れて行き、かわって前方から音が聞こえてきた。地鳴りの音、岩が崩れ落ちるような大きな音、もはや耳にも響くようになったきいきいという不快な鳴き声、そして大勢の人間の叫び声。

同時に前方からは明るい光も洩れてきた。紫光を放つ魔剣の主は、その光の中で影となって立ち止まっていた。

坑道は私たちの閉じ込められていた石牢は通らずに、広間のような洞窟に通じていた。盗賊どもが夜ごと宴を繰り広げていた広間は、今や血と臓物の祝宴と化していた。

いかなる道をたどったものか、大きな洞窟の壁にはぼつかりと穴が開き、そこから金色に輝く巨大な長虫が三匹、広間に侵入していた。一匹は体の長い蚯蚓のような化け物、二匹はずんぐりした体つき、の蛆のような化け物だった。奴らの巨体で広間の中はほとんど埋め尽くされているかのように見えた。だが、よく見れば、妖蛆の巨体の下には押しつぶされた赤黒い肉塊が幾つも転がり、ひどくみすぼらしく見える剣や槍を手にした盗賊どもが奴らのまわりで何とか反撃せんと右往左往していた。

今しも一人の盗賊が、怪物の口から飛び出した肉色の鞭に絡み取られ、幾重にも巻き付かれたかと思うと、血飛沫をあげて八つ裂きとなった。無数の触手はその引き裂かれた体と溢れ出た鮮血を嘗めとるように絡み付き、奇怪に脈打った。

「お頭！これはいつたい……！」

一人の盗賊がドグゴードの姿に気付いたが、最後まで言い終わらぬうちに血みどろの骸となった。

「馬鹿野郎、逃げる！逃げるんだ！」

盗賊の頭目はそう叫んで、走り出そうとしたが、行く手には金色の蛆状の怪物が丸々とした節目のある巨体をのたくらせていた。

「血路を開くとするか」

私が控えめに提案すると、ドグゴードはもはや馴染みとなった虚

ろな薄笑いを浮かべて、短く「ああ」と答えた。

「ウエグ、離れるな」

私の言葉にうなづく彼女を、隻眼の男は無表情にちらりと見やつた。

私たちは肩を並べて、剣を振るつた。ヴラザックが紫の妖しい光を放ちながら、襲ってくる肉色の触手を斬り裂き、ファバーン剣が緑の鮮光とともに、渦巻き状の塊となつて飛び出すものを粉碎した。

妖刀ヴラザックが蛆どもの触手を斬り落とすと、噴き出した白い汚液は人血と同様に刀身に吸い込まれていった。最初に触手を斬つた時、ドグゴードの体がびくんとたうち、恐ろしい苦悶の表情がその顔に浮かんだのが見えた。だが、彼は何ごともなかったかのよ

うに、剣を振るい続けた。
触手を斬り払つた先には金の蛆の巨体が待ち受けていた。目も鼻も耳もないが、奴は私たちの存在を明らかに意識していた。巨大な丸い頭を打ち下ろし、私たちを押し潰そうとした。

私もドグゴードも飛び退いて逃れようとした。だが、ウエグが盗賊の死体につまづいて一瞬遅れた。

私よりも先にドグゴードが気がついた。身を翻し、迫りくる黄金の巨体にヴラザックを突き立てた。妖刀は巨蛆のぶよぶよとした体に根元まで突き刺さつた。

私は必死でウエグの体を化け物の下から引きずり出した。こんなにも彼女の肉は重かつたのだろうか。

ドグゴードは怪物の体に深く突き立てた剣を凄まじい臂力で引き下ろした。数メートルにわたつて妖蛆の体は引き裂かれた。

白濁した粘つく体液が大量に噴き出した。それはドグゴードの体に降り注ぐ寸前に有り得ない様で、紫光を放つ妖刀に吸い込まれた。

私はウエグが蛆虫の体の下から逃れたことを確かめると、踵を返し化け物にファバーン剣を突き刺した。氷壁の岩室と同様の、異様な昂りが刀身から伝わってきた。無数の光の粒が神秘文字の刻まれ

た刀身から広がり、怪物の体に突き刺さつた。

瞬時にして金色の光は消え失せ、醜い傷口が蛆虫の全身に広がつた。白いどろどろの体液がそこから噴き出し、化け物は急速に萎んで、しわくちやの灰褐色の塊と化した。

怪物の巨体の消えた跡には、洞窟の外の青い空の光が広がつて

いた。
私たちはその青空に向かって走つた。広間の中では、残る二体の妖蛆が身をくねらせ逃げ遅れた盗賊どもを肉塊に変えていた。だが、私たちに彼らの命を救うゆとりはなかった。ただ、出口の青空に向かつてひたすら走つた。

広間から外に通じる短い坑道を抜けようとする時、背後から大音響と物凄い地響きが襲つた。もうもうたる噴煙が後ろから迫つてくる。新たな化け物どもが、広間を崩壊させたのだろうか。

粉塵と石礫の嵐よりも、一瞬はやく私たちは外へ出た。黄色い土の上を転がるように走り抜け倒れ伏すと、坑道の入り口から灰褐色の凄まじい噴煙が噴き出し、続いて物凄まじい大音響とともに、入り口上の岩壁が崩れ落ちた。

噴煙が去つた跡には、ただ巨大な岩石の山が築かれているだけだつた。幾つもあった坑道は完全に塞がれていた。地鳴りも頭の中に響く甲高い声も、もはや聞こえては来なかった。

盗賊の残党は散り散りに逃げ去り、崩壊した岩壁の前には私たち三人しか人影はなかった。

私とドグゴードは長槍二本分ほどの間を保つて対峙した。笛の鳴るような音がして強い風が吹き、黄色い粉塵を吹き払つた。

埃だらけの黒い引き回しが風になびいた。吸血の妖刀は、強い日差しの下でもはつきりとわかる紫の怪光を放っている。それだけで

はなく、陽炎のようなゆらゆらとする何か彼の全身から立ち上っているように見えた。眠そうにも見える重たげなまぶたの下で、ただ一つの瞳が異様にぎらつく光を発していた。

この斬り合いには何の意味があるのだろうか。ウエグは今でも私を愛していると言った。ドグゴードは私にウエグを奪われたと思いつづけている。どちらも、今の私には遠い感情だった。

「偶然の再会の仕上げをするとしてようじゃないか、ランケン」

旧友は、力なく剣先を下げたまま、ぶらりぶらりと近づいてくる。それが相手を油断させる、あるいはかえって不安をおおる計算された動きであることはわかっていった。剣術学校時代の彼は、そんな動きはしなかった。むしろ指南書通りの固い戦法をとる男だった。

放浪の年月は彼の色々な部分を変えた。

ドグゴードが声を発すると、かすかなきいきいという不快な響きが頭の中に生じたように思えた。ぶらぶらと近寄ってくる足取りは、わずかな足音をたてるだけなのに、どこからか不気味な地鳴りのような響きが聞こえてくるようだった。

妖刀ヴラザックが吸い取った黄金の妖蛆の白い血が、ドグゴードに何らかの変化をもたらしたのだろうか。ただ血を吸うだけではなく、魂を吸い込み虜にする魔剣だと、彼は言っていた。

ウエグは私の後ろに佇んでいた。怯えるようでもなく、昂ぶるようでもなく、ただ透徹した青い瞳で私たちの戦いを見ていた。奇怪な金色の光さえ放ち始めたドグゴードの隻眼より、背後のその青い瞳の方が気になった。

「止めよう、こんなことをしても何にもならない」

私の言葉に力はなく、吹き抜ける風に飛ばされていくかのようだった。

「ああ、何にもなりはしない。何かを得られるわけではない、何か返ってくるわけでもない。だが、何かを終わりにすることはできるさ」

ドグゴードは刀傷で歪んだ唇をさらに歪めて、そう言った。無限の広がりを持つ青天井の下で、その声は虚ろに響いた。

ぶらぶらと近づいてきたドグゴードの体が瞬時に動いた。紫光を放つ刃が稲妻のように胸元に落ちてくる。私は太古の魔剣でその刃を受け止め、跳ね返そうとした。

何か異様な感覚が伝わってきた。ファバーン剣を通してでも、血と魂を吸い取ろうとするおぞましい妖刀の力、怨念と憎悪と破壊の煮えたぎるような塊は吸い込まれた妖蛆のものだろうか、そしてファバーン剣自体が発する何か。

それは先刻岩室の中で、黄金の蛆虫を屠った時と同様の感覚だった。さらなる戦いへ駆り立てる昂ぶり、敵を打ち倒す勝利の快感への渴望、怨敵と剣を交えることへの喜び、そうした感覚が疼くような脈打つ流れとなつて、私の中へ流れ込んできた。

この魔剣を私に授けた男―ゲルカムのザイナー、ガナトリンの聖戦士ザイナーと名乗った―は、四千年前の光と闇の戦いを語った。ファトランなる光の神とエフセヴォラなる闇の神との戦いを。ファバーン剣は英雄ザイナーが邪神エフセヴォラを倒すために振るった魔剣なのだ。

その意志が、今、蘇ろうとしているのだろうか、封印されていた黄金の妖蛆はかつて地上を渾沌に帰そうとした邪神エフセヴォラの末裔なのだろうか。あるいは妖刀ヴラザックが、あるいは今は隻眼となつた旧知の男が、そうした存在なのだろうか。

異様な力が柄から流れ込み、そうした考えが瞬く間に私の頭の中を駆け巡った。だが、今はこの刃をはね返さねばならなかった。

私は剣に力を込めるようなふりをして、怒声を上げながら、ドグゴードの股間を蹴り上げた。剣を持った腕が下がり、ヴラザックが肩口に浅い傷を作った。わずかに流れ出た血が服の裂け目から、吸血刀へと宙を飛ぶ。

ドグゴードは激痛に耐えきれず、よろけて後退した。私はためらわず次の一手を打ち込んだ。切先は、よろけた男の左腕の籠手を斬

り裂き、血飛沫が舞った。

赤い飛沫は瞬時にして、紫に光るヴラザックの刀身へと吸い込まれた。この妖刀は持ち主の血さえ吸い取るのだ。

ドグゴードはぶるつと身を震わし、自らの手にある奇怪な剣を見やっした。そして猛烈な勢いで打ち込んできた。

かつては彼の指南書通りの攻めの隙をついて、一本取ったりしたものだったが、今や好敵手はメルカー大陸西岸から東岸までのあらゆる剣技を身に付けているかのようだった。大上段からの強烈な一撃が頭上を襲ったかと思うと、ニュールイーギスの貴族のような鋭い突きが脇腹をかすめる。接近戦での身を翻しての素早い攻めはスベルコ人仕込みだろうか。

だが、私にも世界放浪の旅で知った実戦向きの様々な技があった。チャドウラン海海賊船長、アニヤチ奥地の老師、ロマーナの没落騎士、あるいは得体のしれぬ異界のものたち……様々な者たちから会得した生き延びる技を使って、私は死の刃をかわし、緑に光る剣を振るった。

二振りの魔剣がぶつかり合うと、紫と緑の火花が飛び散り、電光さえ走った。ファバーン剣からは身を奮い立たせるような、不思議な何かが流れ込んでくる。それは非常な違和感を伴うものだったが、少なくともこの強敵と戦い続けるためには必要なものだった。

ブラザックは彼の心に何を注ぎ込んでいるのだろうか。自らが斬ったものたち、血と魂を吸い取ったものたちの怨念と憎しみが、彼に力を与えているのだろうか。金色の妖蛆の怨念とはいったい如何なるものなのだろうか。

私たちは何十手となく斬り結んだ。互いにあちこちから血を流し、息は上がり、手足が疲労に痛んだ。だが、それでも剣を振るい続けた。

ドグゴードは土気色の顔に汗をかき、足下がふらつき出していた。だが、ヴラザックの刃には紫と金色の入り交じった光の渦が絡みつき、まるで持ち主の体を引きずるように、素早い動きで襲いか

かってくる。私もファバーン剣に引きずられるように動いているのだろうか。

ぶつかり合い、互いを鏝迫り合いで跳ねのけると、私たちは互いによろけて、尻餅をついた。私はファバーン剣を取り落とした。急いで拾おうとすると、その先にウエグの姿が見えた。

ウエグは緑の女神像を握りしめ、青い目を見開いて何ごとか呪文のようなものをつぶやいていた。埃まみれの〈ヴアラナの花〉は、祈願がかなうまで百日も祈り続けるというジャクレン教の聖女のように見えた。

それで、立ち上がるのが一瞬遅れた。妖刀ブラザックはもう目の前にあつた。刀身に刻まれた佶屈怪異な文字の上を紫と金の小さな火花が、虫のように這い回るのが見えた。きいきいという耳障りな音、苦痛にあえぐ人間の声まで聞こえるような気がした。

「ランケン、これで終わりだな。とつくの昔に終わったと思つていたことだが、これで本当に終わりだ」

ドグゴードがどす黒い声で言った。吸血の魔剣が振り上げられた。

「終わらないわ」

ウエグの声がした。ドグゴードの肩越しに彼女が盗賊の剣を持ち、斬りつけるのが見えた。

ドグゴードの肩口から血が噴き出し、妖刀へと吸い込まれる。ドグゴードは振り向きざま、ヴラザックを一閃させた。ウエグが真っ赤な血を噴いてくずおれる。その血もまた生き物のように紫光を放つ刃へ吸い込まれていく。

私の中から急速に、戦う意志が消え失せていった。まだ青緑の光を発しているファバーン剣を拾い上げたが、すぐにもそれを放り出したかった。

ドグゴードは肩の傷を押さえ、妖鬼の剣を杖にして立ち尽くしていた。

ウエグは胸から腹にかけて傷を負い、血まみれで横たわってい

た。左手にはまだホライウオードの女神像を握っていた。緑玉の女神もまた血まみれだった。

「ウエグ！」

フアバーン剣を投げ捨て、抱き起こすと、青ざめた唇が震えていた。

「ランケン……女神に祈ったわ。ホライウオードの女神は、解放の神よ……束縛から解放されて真実の……愛を……」

ウエグの言葉はそれ以上聞き取れなかった。腕から力が抜けて、女神像は瓦礫の中へ転げ落ちた。緑玉でできているはずのそれは、ひび割れ砕け散った。

その時、幾頭もの馬の駆ける音が聞こえてきた。九十九折りの山道に黄色い土埃が立っている。音は近づき、山裾からの道に銀色に光る矛先と金と青の三角旗が現れた。

「そこだー！盗賊団の根城だ！良いか、まずウエゲナー・ダイン様を探せ！陛下の勅命であるぞ！」

下知の音が聞こえ、数十騎の騎馬隊が見るうちに近づいてきた。陽光に白銀の甲冑が光り、青地に金の鉤爪の紋章を描いた幟がはためいていた。〈金爪隊〉、国王直属の選り抜き部隊だ。どうやら大変な大捕り物になっているらしかった。

「ランケン、勝負はまだついていない。俺は……死なんぞ」

ドグゴードがざらざらとした声を喉から絞り出した。革の胴鎧の裂け目から流れ出た血は、魔剣の刃の方へ生き物のように動いている。一つだけの目で、倒れて動かないウエグの蒼白な顔に一瞥を投げると、奇怪な妖刀を鞘に収めた。それには渾身の力が必要なようだった。

旧友は、踵を返すとふらつく足取りで岩山の陰に姿を消した。

「いたぞ！そこだ！」

振り向くと、口髭を蓄えた隊長らしき男が叫んでいた。たちまちの内に私たちは騎馬隊に囲まれた。

「おお、ダイン様、お気を確かに！」

彼らは担架に乗せてウエグを運んでいった。医師や馬車も待つているのだろう。

「貴様は？」

隊長はうさん臭げに私をじろじろと見回した。盗賊だと即断されなかつただけ、増しということなのだろう。

「まず、君が名乗りたまえ。〈金爪隊〉は礼節を重んじるんだらう」

側にいた若い兵士が、籠手をはめた手で私に殴りかかろうとした。隊長がかるうじて制した。

「〈金爪隊〉第一中隊長へズだ。これはどういうことだ？」

「スナブ・ランケン、探偵だ。隊商の護衛として雇われた。結果はごらんの通りだね」

へズ隊長は、ますますうさん臭げに私を見回した。

「他の者はどうした？」

「死んだか逃げたか、どつちかだ」

軍人は崩れた岩壁や、逃げ遅れた盗賊の死体、ばらばらに壊れた粗末な小屋の跡などを順繰りに見ていった。

「ここで何があつた？」

「いろんなことだ」

隊長も私を殴りたそうな顔をしたが、とりあえず気持ちを抑えることはできたようだった。

「話は宮殿の地下牢で聞くことにしよう。こいつを連れていけ！」

盗賊団の岩牢よりも居心地が良いことを私は願った。宮殿の牢獄だから、絨毯でも敷いてあるのだろう。

王宮の牢には絨毯は敷かれていなかった。粗末な木の寝台がかるうじて置かれていたが、布団も藁もなかった。食事はひどく固い麵

麴で食べるのに長い時間がかかったが、牢獄暮らしの単調さに対する国王陛下のお気遣いなのだろう。

灰色の法衣を着た表情のない男に、あったことを根掘り葉掘り聞かれた。個人的なこと以外は素直に答えてみたが、男は吸血の妖刀のことに、金色の妖蛆のことは、どうしても信じようとしなかった。

一週間ほどして、警邏隊のノップラントが迎えに来た。いつも通り苦虫をかみつぶしたような顔をして、あばた面をさらに取っつきにくいものにしていった。

「今度は警邏隊の牢屋送りかい。晩飯にシエアはつくんだろいな」

「つまらぬ減らず口はたたくな。南部局で手続きをしたら無罪放免だ。ダイン家から強い申し入れがあつた。スナブ・ランケンなる者、当家で雇い入れた者であり、ウエゲナー嬢の命の恩人であるゆえ、即刻解き放つようにな」

「ウエゲは生きているんだな」

鉄格子の向こうで古強者の警邏は怪訝な顔をした。

「ウエゲだと？ どういう間柄なんだ？」

「即刻解き放つんだろ」

ノップラントはさらに渋い顔つきになった。

「ああ、生きてるよ。傷は浅手だったようだ」

「そうか」

牢の鍵を開けに来た若い兵士もまた、不満げな顔をしていた。警邏隊と国王の兵が不仲なのは、サンジェリイでは子どもでも知っている。

牢獄を出る時に、ファバーン剣を返された。握つても何の感覚も伝わっては来ない。ただの古びた剣にしか見えない。だが、私はそれを腰に吊る時、一瞬ためらいを感じた。

警邏隊南部局で、三枚ほどの紙つぺらに署名をして、私は自由の身となった。クーリカフ街のわが家に帰り着くと、アブリユード宝石商会の屋号を記した馬車が止まっていた。

焦げ茶色の仕立ての良い服を着た男が降りてきた。依頼を受けた時と同じ男だろうか。焦げ茶の服は覚えていたが顔を思い出すことができなかった。

「スナブ・ランケン様、この度は誠にありがとうございました。ダイン家当主、並びにウエゲナー様に代わりまして、御礼申し上げます」

焦げ茶の服の男は深々と頭を下げた。それから、そそくさと馬車の中から革袋を取り出した。

「お約束のものでございます。もちろん、この度の格別のお働きへの感謝の意も込めさせていただきます」

男はもう一つの革袋を取り出した。こちらの方がずっと大きく、重そうだった。ウエゲナー・ダインの命の値段とはいったい幾らになるのだろうか。私は知りたくなかった。

「それはいらぬ。最初の約定通りのものをいただくよう」

「左様でございますか。わかりました」

ダイン家の使者はためらわず大きな革袋をしまい込んだ。

「ランケン様、もう一つ、ウエゲナー様よりのお預かり物がございます。これをぜひランケン様へとのことでございます」

高さが一イート、幅が半イートほどの木箱を彼は私の腕に押し付けた。

「それでは、ご機嫌よろしゅうございますように」

焦げ茶色の男は馬鹿丁寧に挨拶をすると、馬車に乗り去っていった。

しばらくぶりに帰った机の上にはうつすらと埃が積もっていた。

私のその上に革袋と木箱を置いた。

革袋を開けるとじゃらじゃらと金貨がこぼれ落ちた。約定を違えることはあり得なかった。枚数は数えずそのままにしておいた。

それから木箱を開けた。藁屑の詰め物の中から酒瓶が現れた。貼札には鴉の絵が描いてある。馴染み深い〈古鴉〉のアイコンだが、今日の鴉殿は金ぴかでご丁寧に冠までかぶっていた。いつもの奴が

十本くらい買えそうだった。

私は机の引き出しから馴染みの黒ずくめの〈古鴉〉を取り出し、青硝子の酒杯に注いだ。まだ日は高く、部屋の中は明るかった。金ぴか鴉の酒瓶と、ダズン金貨の山と、ゆっくり漂う埃を眺めながら、安いダイコンをすすった。

エル・ゴ・ドナの岩山から、地鳴りのような音がするという噂話が酒場で囁かれた。トリプロ街のさる魔道士が高額で王宮に雇われ、荒地で何らかの術を執り行ったという話もあった。

一月ほどすると〈ヴァラナの花〉がアイトーネ街の社交の場に姿を現すようになったという話を聞いた。新しい愛人は若い詩人だという噂もあった。彼女が胸の開いた服を着なくなったと囁く者もあった。

エイマン王と〈金爪隊〉は白銀街道の盗賊狩りを行ったが、〈紫電の犬〉の首領が捕まったという話はどこからも聞こえては来なかった。

私は職人を雇い、建て付けの悪い扉を直したり、ひび割れた壁を塗り直したりした。それでも金貨はまだ少し残った。

金ぴか鴉のダイコンは、ガーステア族の呪い人形やコスクナの水晶髑髏の並ぶ棚に収まった。いつか、それを開ける時があるのかもしれない。どんな時なのか、想像できなかった。

何も終わっていないのかもしれない。ウエグは「終わっていないわ」と言った。ドグゴードは「俺は死なんぞ」と言った。

私には台詞はなかった。ただ、一人で安酒を飲み続けた。